

CONTENTS

Project Team for Paleolithic Studies:	
Survey of Paleolithic Sites in Western Kanagawa Prefecture:	
Examples of excavations associated with the construction of	
National Route246 (Atsugi Hadano Road)	1
Project Team for Jōmon Period Studies :	
Change of the Jōmon Culture in Kanagawa Prefecture (X):	
An Example in the middle part of Late Period.	
An Aspect of the Kasori-BType Pottery Period,Part3	11
Project Team for Yayoi Period Studies:	
Study of pit dwellings in the Late Yayoi period(8)	23
Project Team for Kofun Period Studies:	
Burial mound surveys in Atsugi City,Isehara City,and Hadano City (2):	
Recent survey cases and surrounding mounded tombs	37
Project Team for Nara-Heian Period Studies:	
Kaiyu-toki assemblages from a settlements in Kanagawa Prefecture	
—A case study in Hadano city and Isehara City—	45
Project Team for Medieval Age Studies:	
Remains of the medieval period in central Kanagawa(9)	53
Project Team for Early Modern Age Studies:	
The corpus of structural remains of the road in the Early Modern Age(9)	65

July, 2025

KANAGAWA Archaeology Foundation

Yokohama, Japan

かながわの考古学

研究紀要 30

かながわの考古学

二〇二五

公益財団法人 かながわ考古学財団

2025. 7

公益財団法人 かながわ考古学財団

かながわの考古学

2025.7

公益財団法人 かながわ考古学財団

はじめに

1990（平成2）年11月に神奈川県立埋蔵文化財センターより刊行された『かながわの考古学』第1集から、1995（平成7年）刊行同第5集までを引き継いで、1996（平成8）年に神奈川県立埋蔵文化財センターと財団法人かながわ財団によって、新たに研究紀要Ⅰ「かながわの考古学」が刊行されました。2000（平成12）年の研究紀要5からは財団法人かながわ考古学財団によって単独で刊行することとなりました。刊行以来、本財団の各時代別の研究プロジェクトによる学術研究の成果と、本財団の研究助成制度を活用した職員の研究論文を掲載して参りました。

本書が考古学研究の一助となることを願うとともに、皆様のご高評を頂きたく存じます。

2025（令和7）年7月

公益財団法人かながわ考古学財団

目 次

県西部における旧石器時代遺跡の調査事例について —一般国道246号（厚木秦野道路）建設事業に伴う調査事例— 旧石器時代研究プロジェクトチーム	1
神奈川県における縄文時代文化の変遷X —後期中葉加曽利B式土器文化期の様相— その3— —土器編年案構築に向けて— 縄文時代研究プロジェクトチーム	11
弥生時代後期竪穴住居の研究（8） 弥生時代研究プロジェクトチーム	23
厚木・伊勢原・秦野の古墳調査（2） —近年の調査事例と周辺の古墳について— 古墳時代研究プロジェクトチーム	37
県内集落出土の灰釉陶器の組成 —秦野市・伊勢原市の事例について— 奈良・平安時代研究プロジェクトチーム	45
神奈川県の中世地域の中世遺跡（9） —かわらけの検討V— 中世研究プロジェクトチーム	53
近世道状遺構の集成（9） 近世研究プロジェクトチーム	65

例 言

1. 本書は、公益財団法人かながわ考古学財団の職員で構成する研究プロジェクトチームが、時代ごとに共同研究を行った結果を掲載するものである。

2. 各研究プロジェクトチームの構成は以下のとおりである。

(五十音順・◎はプロジェクトリーダー、○はサブリーダーを示す)

・旧石器時代研究プロジェクトチーム

大塚健一・栗原伸好・畠中俊明・◎三瓶裕司・○森ゆき乃

・縄文時代研究プロジェクトチーム

阿部友寿・出縄康行・井辺一徳・岩 佑哉・岡 稔・◎小川岳人・○粕谷 隆・小島清一・野坂知広・三橋友暁・山田仁和

・弥生時代研究プロジェクトチーム

○飯塚美保・池田 治・齊藤巧真・宍戸信悟・◎新聞基史・戸羽康一・吉田知世・渡辺 外

・古墳時代研究プロジェクトチーム

◎植山英史・柏木善治・勝又愛歩・張ハヌル・○新山保和・吉澤 健

・奈良・平安時代研究プロジェクトチーム

加藤久美・齋藤 葵・◎諏訪間直子・○高橋 香

・中世研究プロジェクトチーム

小林友佳・○相良英樹・中村淳磯・◎松葉 崇・宮坂淳一・山口正紀

・近世研究プロジェクトチーム

◎井関文明・川嶋実佳子・木村吉行・南出俊彦・○宮井 香・脇 幸生

県西部における旧石器時代遺跡の調査事例について

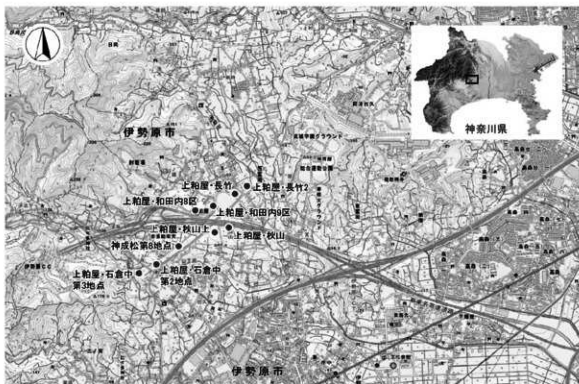
—一般国道246号（厚木秦野道路）建設事業に伴う調査事例—

旧石器時代研究プロジェクトチーム

はじめに

平成25年度に始まった国土交通省による一般国道246号（厚木秦野道路）建設に伴う事前の埋蔵文化財発掘調査は、現在、伊勢原及び厚木市内において進められており、特に伊勢原市内の調査においては、旧石器時代の資料が増え続けている。しかし、各作業は発掘作業を優先して行なっており、出土品等整理作業はまとまった範囲の発掘作業が終了してから実施しているため、多くの資料が出土品等整理作業を待っている状態となっている。

さて、本旧石器時代研究プロジェクトチームでは、以前「県西部における旧石器時代遺跡の調査事例について—新東名高速道路建設事業に伴う調査事例—」と題して旧石器時代の調査成果を集成し、いち早くその概要を紹介した。今回の事業で得られた調査成果についても、報告書刊行までに長期間を要すると考えられる。このためここでは、これまでの主な調査成果について、その概要を既発表資料記載内容の集成を中心に報告する。詳細については、今後随時刊行されていく調査報告書をもって正式な報告とさせていただきます。なお、出土層位の表記は、全て相当層として理解されたい。



第1図 遺跡位置図

上粕屋・石倉中遺跡第2地点

所在地：伊勢原市上粕屋1493-2外

遺跡立地：鈴川が形成した上粕屋扇状地の扇頂部付近、鈴川に面した段丘上に立地し、標高は85～87mを測る。遺跡が立地する段丘は扇頂部のある北から端部が広がる南へ向けて緩やかに下り、また西側にある鈴川の谷と東側の瀬谷に向けやや傾斜した緩やかな尾根状地形となっている。

調査概要：2015（平成27）年度の調査では、B0層よりブロック4箇所と2基の配石を伴い、細石刃石器群が出土している。細石刃は黒曜石製が大半を占めるが、その他ガラス質黒色安山岩製で両面調整石器を含む剥片石器が出土している。調査時の石器点数約3,500点、土壌洗浄により石器総数は約9,000点に及ぶ。なお、上粕屋・石倉中遺跡については、令和7年度に報告書刊行の予定。

上粕屋・石倉中遺跡第3地点

所在地：伊勢原市上粕屋

遺跡立地：上粕屋扇状地の扇頂部付近。石倉中遺跡第2地点から県道を挟んだ東側に位置している。

調査概要：L1H層上部より礫器1点が出土している。

上粕屋・神成松遺跡第8地点

所在地：伊勢原市上粕屋

遺跡立地：遺跡は産業能率大学の南側に位置し、開析谷に挟まれた台地上に立地する。

調査概要：平成27年度の調査ではB1層上部で炭化物集中が1か所確認されている。令和2年度には4区からL1H層下層～B1層上層中から凝灰岩製の石核1点が出土した。令和3～4年にかけての調査では、7区から安山岩製の槍先形尖頭器1点がL1S層下層から出土した。8区からは凝灰岩製の剥片1点がL1H層下層～B1層上層中から出土した。10区では凝灰岩製の石核、剥片、砕片24点によるブロックがB1層中～下層中から出土している。

上粕屋・和田内遺跡第4次調査（7区・9区）

所在地：伊勢原市上粕屋2996-10番地外

遺跡立地：鈴川が形成した上粕屋扇状地の北縁、東西方向に延びる丘陵裾部に位置する。

調査概要：2016（平成28）年度、2019（平成31）年度の調査にて旧石器時代の石器群が確認されている。

平成28年度の調査では、7区にてB1層（第Ⅰ文化層）とB2L層（第Ⅱ文化層）で石器が確認されている。第Ⅰ文化層では、2箇所の石器集中部（ブロック）が検出され、ナイフ形石器・槍先形尖頭器、石核、剥片、砕片等がおおよそ1,000点出土し、主な石材は黒曜石である。第Ⅱ文化層では、石核、剥片類が中心でおおよそ6割が黒曜石製である。石器群には礫群が伴っており、礫群中から2点の磨石が発見された。また、約2×12mの範囲に炭化物集中が確認された。

平成31年度の調査では9区にて旧石器時代の石器群が発見された。調査地点は、富士黒色土形成以前に大規模な地滑りと崩壊を経験したようで、ローム層のL1S層からL2層が認められない。石器群は、B2L層より出土し、調査段階にて「調査区北半、緩斜面の上方に大きく二つに分かれるブロック群と礫群の展開を確認した。」「南北2両群を合わせて、ブロックは最低でも10以上、礫群は7基以上あると思われる。」

と報告されている。主に南側のブロック群からは、角錐状石器、切り出し形のナイフ形石器、スクレイパー、磨石、敲石のほか、横刺ぎの石材から製作された国府型ナイフ形石器が発見された。なお、石器石材は黒曜石、チャート、安山岩、細粒凝灰岩などからなる。

上粕屋・秋山遺跡第2・3次調査

所在地：伊勢原市上粕屋

遺跡立地：伊勢原台地北方の丘陵地帯に位置する。周辺は、大山南東麓から南下する鈴川が形成した扇状地にあたる。調査地は、この台地の北東端部付近にあり、北側は渋田川支流が形成した低地、東と南は北側低地から南へ入り込む小支谷より画された舌状の台地端部周辺に位置する。

調査概要：石器群は、L1H層中位とB1層（現時点では上部）の概ね2つの文化層が想定される。

L1H層の上部は、赤色スコリアの密集帯からはじまり、中位辺りに大粒の黒色スコリアがやや集中する様子が捉えられる。L1H層の基底は、現状では赤色スコリアの密集帯をもって最下底とし、スコリア帯の基底をL1H層とB1層の境としている。ただ、赤色スコリアの密集帯は幅が20cm程度有り、ここから下は上層より締まっている。そのため、赤色スコリア帯の上面をL1H層とB1層の境とするほうが、全体の層厚からも妥当と考える。なお、石器群は、黒色スコリアの上部付近と下段の赤色スコリア帯より下部に集中する可能性がある。

器種としては、槍先形尖頭器とナイフ形石器がみられる。槍先形尖頭器は概ねガラス質黒色安山岩製で、L1H層中位辺りから出土しているという。また、ナイフ形石器は二側縁加工の茂呂系ナイフ形石器で、やはりガラス質黒色安山岩製である。ナイフ形石器もまたL1H層中位付近から出土しており、両者の層的違いはここでは確認されていない。

上粕屋・秋山遺跡

所在地：伊勢原市上粕屋字秋山2900-1 外

遺跡立地：調査地点は上粕屋扇状地北縁に位置し、渋田川支流の形成した支谷に面する台地上に立地する。

調査概要：令和3年度から4年度にかけて実施された8区の調査にて、B0層下部～B1層上部にて石器群が発見された。L1H層からは、ガラス質黒色安山岩製のナイフ形石器と槍先形尖頭器がまとまって出土している。

西富岡・長竹遺跡

所在地：伊勢原市西富岡

遺跡立地：伊勢原市の北東にあたり、大山を源流とする鈴川によって形成された上粕屋扇状地の東側縁部付近、この扇状地を東西方向に横断するように流れる渋田川とその支流に挟まれたやせ尾根状台地上に立地している。調査地点はやせ尾根状台地から縁辺部に位置し、東側では標高約55.0m、西側では標高約47.0mと南西側に傾斜する地形である。

調査概要：令和3年度から4年度にかけて調査が行われ、B0層下部からB1層上部で黒曜石製の細石瓦石器群の出土がまれ、一部は未調査範囲に分布がさらに延びることが分かっている。黒曜石の分布と同様に安山岩製の槍先形尖頭器も出土し、この傾向は隣接の2・3次調査と同様であることが明らかになった。

石器が集中していたエリアより若干はずれた北側で炭化物集中が確認されている。

B1層からナイフ形石器や剥片等とともに礫群が検出されている。石器ブロックは黒曜石を中心としたブロックと凝灰岩を中心としたブロックにわかれる。礫群は散漫と礫が分布するような状況であった。その後、L3層で、炭化物の集中と剥片が確認された。B4層まで調査をしたが、遺物は確認されなかった。

西富岡・長竹2遺跡

所在地：伊勢原市西富岡

遺跡地：本遺跡は大山から延びる扇状地が渋田川とその支流によって複雑に開析された台地上に所在する。この台地は複数の小河川により開析された結果、川の中州のような独立台地となっており、近隣の西富岡・長竹遺跡や渋田川を挟んだ対岸に位置する西富岡・中島遺跡が立地する台地に比べ、一段低い台地である。

調査概要：B0層から凝灰岩製と黒曜石製の剥片が各1点出土した。

第1表 厚木秦野道建設に伴い発見された旧石器時代遺跡

遺跡名	所在地	出土層位	主な出土遺物・遺構	主な石材	調査年度	備考
上相屋・石倉中遺跡第2地点	伊勢原市上相屋	30層～L10層上面	礫石方石部群（第） ブロック、配石 2500点以上	黒曜石	2015（H27）	フルイ含む9000点以上 17年度報告書発行予定
上相屋・石倉中遺跡第3地点	伊勢原市上相屋	L10層上部	礫部集		2015（H27）	
神成包遺跡第8地点	伊勢原市上相屋	31層上部	炭化物集中		2015（H27）	
		L10層下部～31層上層中	石核（単独）	凝灰岩	2020（H32）	
		L15層下部	槍先形尖頭部（単独）	安山岩	2021（H33）	
		L10層下部～31層上層	剥片（単独）	凝灰岩	2021（H33）	
		31層中層～下部	石核、剥片、砕片など34点 ブロック	凝灰岩	2021（H33） 2022（H34）	
		31層上部	ナイフ形石器、剥片 3点	黒曜石	2022（H34）	
上相屋・和室内遺跡第4次調査 （7区・8区）	伊勢原市上相屋	31層下部	ナイフ形石器 槍先形尖頭部 ブロック	黒曜石	2016（H28）	
		32層下部	礫石方石部、石核など ブロック、礫部、炭化物集中	黒曜石、硬質凝灰岩	2016（H28）	30年度から 出土品等整理作業 実施中
		32L層	臼形ナイフ形石器、角礫部、ス クレイバー、面形ナイフ形石器 複数ブロック、複数礫部	黒曜石、チャート、安山 岩、凝灰岩	2019（H31）	
上相屋・秋山遺跡第2次調査	伊勢原市上相屋	31層	ナイフ形石器、槍先形尖頭部 硬質土部	黒曜石	2016（H28）	
		L10層下部～31層上部	槍先形尖頭部、ナイフ形石器 複数ブロック	黒曜石	2020（H32） 2021（H33）	
上相屋・秋山上遺跡第3次調査	伊勢原市上相屋	L10層中層	槍先形尖頭部 複数ブロック 2000点以上 礫部	ガラス質黒色安山岩、凝 灰岩	2017（H29）	
		31層	ナイフ形石器	凝灰岩	2017（H29）	中日調査の続き
		記載なし	剥片	凝灰岩	2018（H30）	
		30層下部～31層	槍先形尖頭部、ナイフ形石器 複数ブロック 2000点以上	ガラス質黒色安山岩	2021（H33） 2022（H34）	
西富岡・長竹2遺跡	伊勢原市西富岡	30層	槍先形尖頭部、剥片 3点	ガラス質黒色安山岩	2022（H34）	30・4と同じ広がり
		30層下部～31層上層	剥片2	凝灰岩	2021（H33）	
		30層下部～31層上層	礫石方石部群	黒曜石	2021（H33） 2022（H34）	
西富岡・長竹遺跡	伊勢原市西富岡	31層	ナイフ形石器	黒曜石、凝灰岩	2021（H33）	
		31層	礫部		2022（H34）	
		L3層	炭化物集中		2022（H34）	

※表中の記述内容は、年報30までの掲載内容を取りまとめ、年報記載内容に依っている。

おわりに

今回は、調査報告が刊行されるまで相当数の年月がかかる新東名高速道路建設事業に伴う調査事例の紹介に続くものとして、一般国道246号（厚木秦野道路）建設に伴う調査事例の紹介を企画した。前回の新東名は発掘調査が終了した時点で紹介であったことから、出土品等整理作業を通して得られる新知見以外、調査地点数などは確定数である。

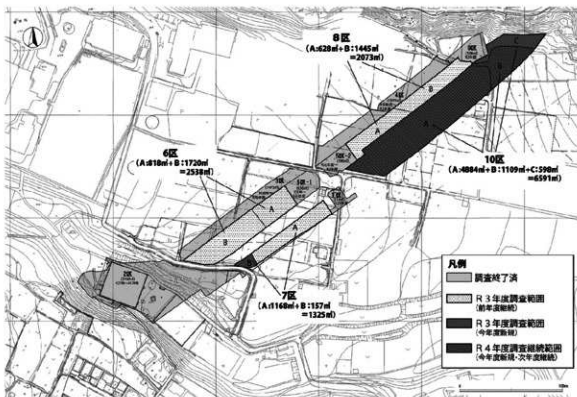
一方で、今回の一般国道246号（厚木秦野道路）建設に伴う発掘調査は令和7年度時点で調査中であり、さらに数年続く事業である。本来ならば新東名と同様発掘調査が終了してからの紹介とも考えたが、上粕屋・石倉中遺跡第2地点、上粕屋・和田内遺跡、上粕屋・秋山遺跡など非常に多くの遺物が出土している遺跡や国府型とみられるナイフ形石器が報告されている上粕屋・和田内遺跡など多様な調査事例が認められた。

これらを受け、いち早く情報の共有を図るものとして暫定ではあるものの、その概要を紹介する機会を設けた。

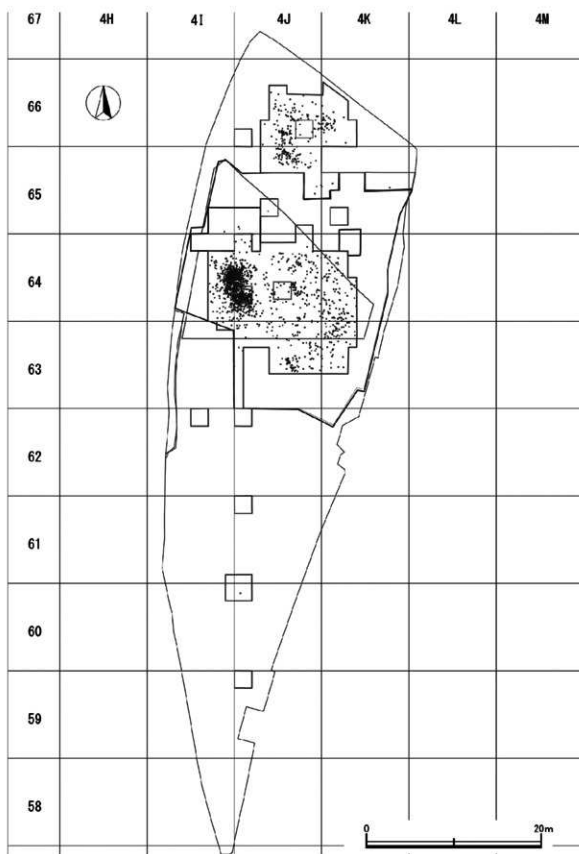
今後、出土品整理作業をととして石器群の様相が詳らになっていくこととなるが、発掘調査の段階からご助言を頂いている方々、今回の資料紹介によって知っていただい方々、出土品等整理作業の中でご指導・ご鞭撻を頂ければ願う次第である。

【参考文献】

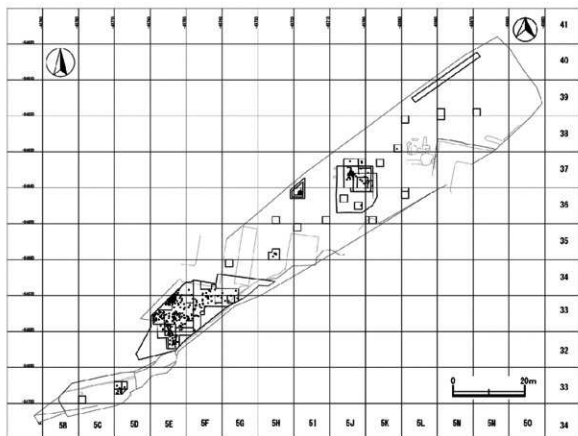
財団法人かながわ考古学財団 / 公益財団法人かながわ考古学財団 2017～2024年 年報23～30（一括記載）



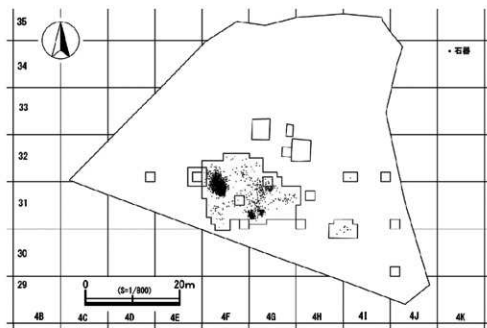
第2図 神成松調査区配置図



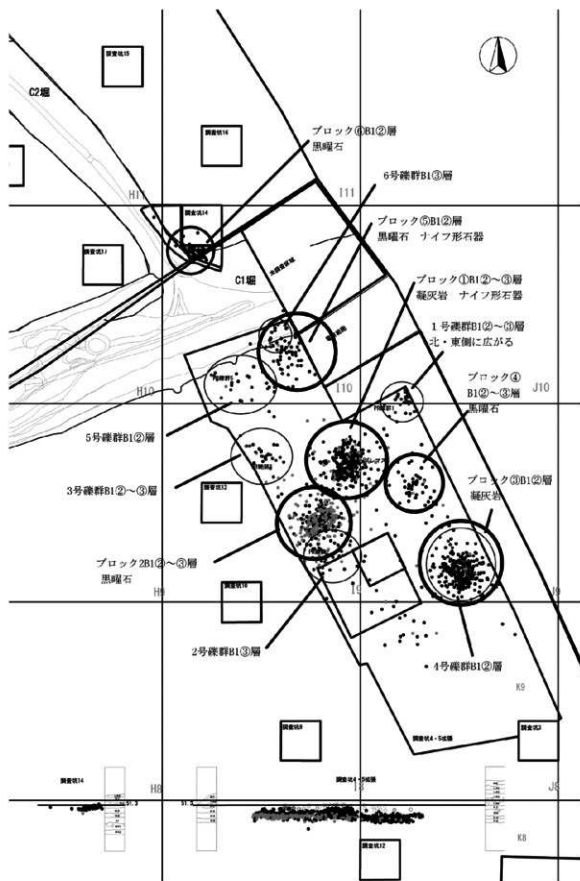
第3図 神成松調査区配置図



第4図 秋山遺物分布図 (L1H層下～B1層上面)



第5図 秋山上8区遺物分布図 (B0相当層下部～B1相当層上部)



第6図 長竹遺物分布図



写真1 神成松10区調査坑



写真2 神成松10区調査坑5



写真3 神成松8地点出土石器 (L1S層)



写真4 神成松10B区調査坑



写真5 神成松10B区調査坑5



写真6 神成松10B区出土石器



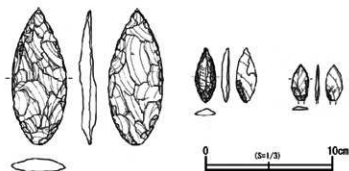
第7図 和田内 出土石器



写真7 秋山 遺物出土状況 ((西から))



写真8 秋山 遺物出土状況 (L1H層)



第8図 秋山 出土石器

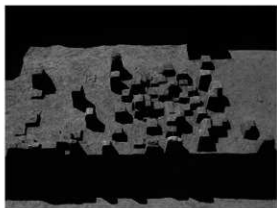


写真9 秋山上 遺物出土状況 (L1H層)



写真10 秋山上 遺物出土状況 (L1H中層)



写真11 秋山上 遺物出土状況 (L1H~B1土層)



写真12 秋山上 遺物出土状況

神奈川県における縄文時代文化の変遷Ⅹ

—後期中葉加曽利B式土器文化期の様相 その3—

—土器編年案構築に向けて—

縄文時代研究プロジェクトチーム

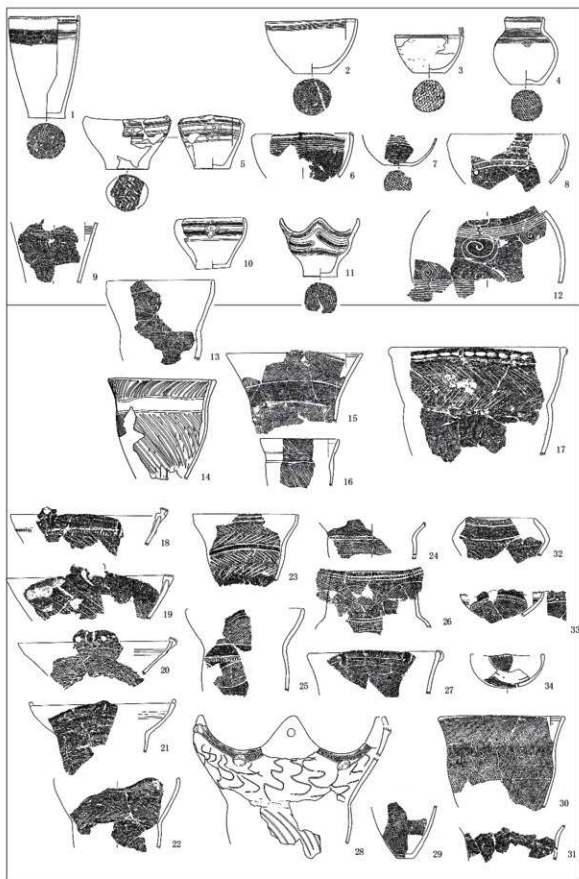
はじめに

今年度は前回集成した遺構からの一括出土事例に基づき、加曽利B式期の土器編年案作成を目指す。しかしながら、前回の集成作業で明らかになったように、当該期の土器群は器種・型式が多様・複雑化する一方で、各段階を通じた良好な共伴事例には必ずしも恵まれてはいない。特に、住居内の出土土器にある程度の時間幅が認められる事例がある一方で、良好な一括出土事例が見出せなかった時期もある。そこで本稿では、一括事例による編年ではなく、前回の作業で抽出した一括出土事例各種土器を、ある程度時間軸に沿った形で並べたものにとどまらざるを得なかった。なお編年上のヒアタスが認められる箇所については、個別の出土事例や他地域の事例を参考として引用し、その隙間を埋める必要があり、また掲載事例についてもなお型式学的な操作が必要である。次年度の作業への課題とした。

土器は一括出土事例ごとに左から、精製の深鉢形土器、鉢形土器、壺形土器あるいは注口土器、浅鉢形土器あるいは算盤形の土器、粗製土器の順で並べている。しかしながら出土数の多寡や時期ごとにおける器種のバリエーションの有無や文字通り紙幅の都合もある為、かならずしも各器種が上下に連なる表とはなっていない。同一遺構の一括出土事例でも、層位の明示がある場合、下層出土の土器を上段に、上層出土の土器を下段に配している。また同じく同一遺構の一括出土事例中に時間的に幅が認められるものは、時間的に古い段階の土器を上段、新しい土器を下段に配しているが、これも厳密なものではなく、詳細については本文中で触れるようにしている。特に共伴事例が多い横浜市華蔵台遺跡の19号住居跡・29号住居跡・32号住居跡および同市小丸遺跡の1・2号住居跡・14号住居跡・28号土坑は左右見開きの図表として、右側の図に精製の深鉢形土器、鉢形土器、壺形土器を左側の図に浅鉢形土器あるいは算盤形の土器、粗製土器を掲載した。

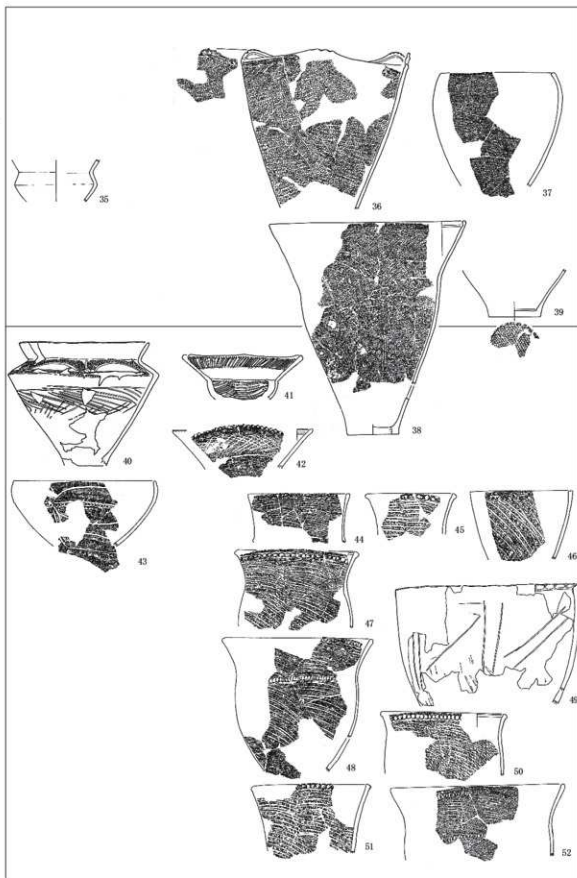
華蔵台遺跡16号住居跡：加曽利B1式～B2式（第1図1～12、第2図36～39）

加曽利B1式期の共伴事例として華蔵台遺跡16号住居跡の事例を掲げる。本住居跡は最大径8～10mほどになる大型の住居跡で、10回を超える建て替えの痕跡を残す。10回前後の建て替えのうち、柱穴列の並びから16a～e号の5軒の住居跡が析出された。標高の最も低い位置にある16e号住居跡が最も古く、斜面上方側の最も標高が高い位置に構築された16a号住居跡が最も新しい。このうち最終段階の16a号住居跡は加曽利B1式に比定されるが、最も古い16e号住居跡については、その形態から堀之内2式期に遡る可能性が指摘されている。住居跡覆土の遺存状況は良好で、斜面上方側で1m近い深さを有する。土器はピットから出土した第1図1・3と床面出土の第1図2・4、住居覆土下層の出土である第1図5～8・第2図36～38、覆土上層出土の第1図9～12、第2図39・40の3群に分けられる。これらのうちピット出土の精製土器の深鉢1と覆土上層出土の9、ピット内・床面から上層までの小型の鉢形土器2・3・5～8・10・11、同じく



第1図 加曾利B1～B3式土器 (縮尺1/8)

1～12華藏台遺跡16号住居跡：加曾利B1～B2式、13～35華藏台遺跡29号住居跡：加曾利B2～B3式



第2図 加曾利B1～B3式土器 (縮尺1/8)

36～39華藏台遺跡16号住居跡：加曾利B1～B2式、40～52華藏台遺跡29号住居跡：加曾利B2～B3式

床面出土の壺形土器4また覆土中層出土の粗製土器37は加曽利B1式である。覆土上層出土の注口土器12が堀之内2式、同じく上層出土の粗製土器39が加曽利B2式と判断される。なお、図に掲載していないが、同じくB2式の粗製土器破片複数点が覆土上層出土として報告されている。床面から覆土上層まで出土土器の大半は概ね加曽利B1式に属するものとしてよく、堀之内2式の注口土器12は下層からの混入、B2式の粗製土器39が埋没後の流れ込みとすれば層位関係と土器型式の間に大きな矛盾は生じない。

1と9は精製の深鉢形土器である。直線的に外側に開く器形で、内面に3条ほどの横位の並行沈線を施す。外面について、1は横位に並行する沈線をクランク状に結び、区画内に縄文を充填するものである。9の外面も4条の沈線を並行させる同様の精製深鉢であるが、クランク状の区切りは無く、縄文も充填されていない。2・3・5～8と10・11は加曽利B1式期を特徴づける精製の鉢形土器である。5は器形が楕円の舟形となる。鉢形土器には「の」の字状の単位文が認められるもの(5・10)がある。また5の口縁部はやや内傾する。単位文は、これを持たないもの(堀之内2式末～加曽利B1式古段階)から持つものへ移行するとされ、深鉢の口縁部は直立したものから内傾したものに移行する。また鉢形土器は小型のものから時期が下るとやや大きくなる傾向にある。住居跡床面およびピット出土の鉢形土器に単位文や口縁部の内傾が認められず、一方覆土出土の鉢形土器に単位文(5・6)や口縁部の内傾(5・8)またやや大きくなる傾向(8)が認められることは、床面・ピット出土の土器と覆土出土の土器で若干の段階差を感じさせると言えないことも無いが、絶対的な数が少なく、断定はできない。36は3単位の波状口縁に直線的な外開きの器形となる粗製深鉢で、口縁部に押圧された粘土紐がめぐり、胴部には縄文と沈線が施される紐線文系土器である。37も縄文が施される粗製深鉢であるが、36とは異なり、口縁部がやや内傾した器形となる。36・37は覆土下層からの出土と報告されている。38は覆土上層出土とされる土器である。やはり縄文の地文に沈線が施された粗製の深鉢形土器であるが、口縁部は平口縁となり、頸部に括れを有する。37よりも新しい傾向を示す加曽利B2式である。図示していないが、覆土上層からは斜位の沈線を格子目に施した半精製土器や頸部に括れを持つ粗製深鉢の破片が出土しており、ともに加曽利B2式と判断される。

小丸遺跡14号住居跡：加曽利B1式（第3図53～56）

加曽利B1式期の一括出土事例として横浜市小丸遺跡14号住居跡・同遺跡28号土坑・同遺跡1・2号住居跡を挙げる。

14号住居跡は3基の炉址と重複する柱穴群からd→c・b→aの4度にわたる建て替えが想定されている。このうち住居跡dが加曽利B1式以前、c→aが加曽利B1式に比定されている。出土土器は少ないが比較的まとまっている。53は床面出土の鉢形土器である。14号住居跡の最終段階に比定された住居跡aに伴う土器としてよいだろう。口縁部は平口縁でやや内傾した器形となる。文様は沈線によってクランク状に区画された中に縄文を充填している。また器面には黒彩と赤彩の痕跡を残す。54～56は覆土中出土の土器である。54は口縁部直下に沈線を多段に配した鉢形土器である。55は口縁部が内傾する鉢形土器で、沈線による区画内に縄文を充填するものである。56は器形と文様から注口土器とみられる。粗製土器は縄文が施された破片のみ認められた。

小丸遺跡28号土坑：加曾利B1式（第3図57～59）

28号土坑は隅丸の長方形を呈する。その形状から墓坑と考えられ、同じく墓坑と考えられる27号土坑と重複するが、前後関係は明らかではない。また27号土坑出土と報告されている小形の鉢形土器もどちらの土坑に属するのか明瞭ではないが、ここでは報告書に倣い、掲載の3点57～59を伴伴事例とする。57は3単位の波状口縁の頂部に左右非対称の耳状突起を付けた精製深鉢形土器である。胴部外面にはクランク状に屈曲させた並行沈線による区画内に縄文を充填し、内側には口縁部に並行させた3条の沈線を配する。58は鉢形土器である。クランク状の区切りを入れた並行沈線を口縁直下の胴部外面に多段に配している。59は小型の鉢形土器である。クランク状の区切りを持つ並行沈線を多段に配している。

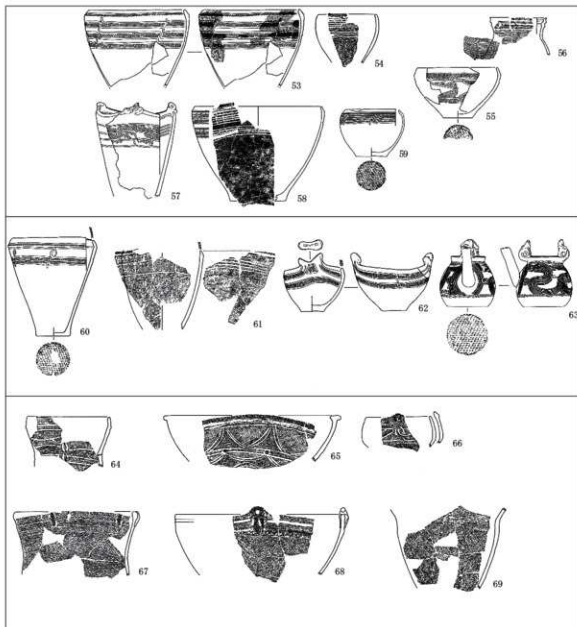
小丸遺跡1・2号住居跡：加曾利B1式（第3図60～63、第4図70～73）

1・2号住居跡は集落遺跡の要というべき位置に占地し、10回を超えた建て替えが繰り返されてきた「多重住居跡」で当該期集落遺跡における「核家屋」とされる住居跡である。出土土器は2基の埋甕を含め、出土土器は繰り返された建て替えのほぼ下限を示す土器群として大過無いものと理解されよう。

図示した土器のうち、73と70が埋甕である。73は縄文が施された粗製土器である。口縁が外開きで頸部がやや括れた器形に図示されているが、拓本で示した箇所から胴部下半の間の破片を欠き、頸部から下は復元である。縄文の施文も頸部までの破片にしか認められていない。70は斜行する沈線を格子目状に施した半精製土器である。60は2号住居跡床面に口縁をほぼ床面に接するように出土したとの記載がある。その一方で報告書の執筆者は、前後関係から、2号住居跡ではなく、1号住居跡に帰属した可能性を述べている。口縁部が内折した精製の深鉢形土器で、外面口縁直下のクランクする沈線は入り組み状となり、これまで見てきた精製の深鉢形土器よりも新しい傾向を示す。61は沈線によるクランク状の区画内に縄文を充填した精製深鉢形土器である。口縁は部分的にしか遺存していないが、波状を呈していることがわかる。柱穴出土と記録されているが、1・2号住居跡のどの柱穴に帰属するは不明である。62は2号住居跡の範囲に位置する柱穴付近の床面上15cmから出土した鉢形土器である。小形・舟形で両端に擴み状の突起部を有する。突起部を有する小形鉢は、これまでの事例より新しい傾向を見せるものとしてよい。63の注口土器について、出土状況は不明である。型式的にはここに示した他の土器に比較して古い傾向を示し、あるいは時間的に先行する位置に置くべきかもしれない。71は2号住居跡の覆土下層、72は1号住居跡の床面から出土している。71・72とも縄文のみが施された粗製深鉢形土器である。ともに外開きの器形で頸部の括れを有していない。

原口遺跡J13号敷石住居跡：加曾利B1式（第5図79～92）

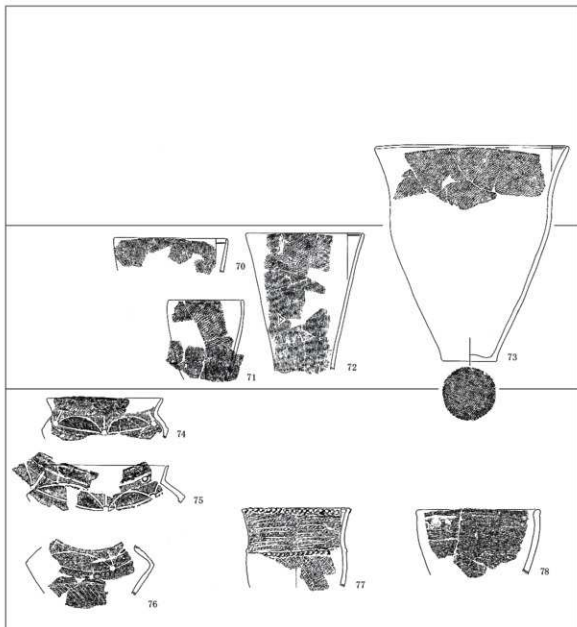
J13号住居跡は遺跡の北東側に突出する舌状台地の基部に位置し、道路エリアと呼ばれる狭小な調査区での検出である。加えて2基の方形周溝墓に覆土と床面・柱穴・敷石を切られ、全容は不明である。住居跡の張り出し部を中心とした範囲の調査となった。ここに図示した資料は敷石の上面あるいは下面からの出土である。79～84は精製の深鉢形土器である。79・80は口縁直下の外面に沈線によるクランク状の区画を配し、内面にはやはり口縁直下に並行する沈線を多段に配するものである。クランク状の区画に縄文は施していない。79は平口縁、80は3単位の波状口縁となる。81は3単位の波状口縁の頂部に、左右非対称の耳状突起を付けた小型の精製深鉢形土器である。口縁直下の並行沈線による区画は入り組み状をなし、内外面の沈線間に縄文を充填している。82は口縁直下の外面に沈線によるクランク状の区画を配し、内面にはやはり口縁直



第3図 加曾利B1～B3式土器（縮尺1/8）

53～56小丸遺跡14号住居跡：加曾利B1式、57～59小丸遺跡28号土坑：加曾利B1式、60～63小丸遺跡1・2号住居跡：加曾利B1式、64～69葦藏台遺跡32号住居跡：加曾利B2～B3式

下に並行する沈線を多段に配するもの。79同様の器形となるが、外面の区画内に縄文を施す。83も同様のものだが、口縁部は内折し、内側の屈折部に横位に連続する円形刺突を施す。84は内外面ともに並行する沈線を多段に配するものである。85～87は小型の鉢形土器である。84は縄文が施されたもので、小型の深鉢形土器の可能性もある。86は無文の鉢形土器、87は口縁直下の外面に沈線を多段に施した鉢形土器になる。87の口縁は緩やかな波状を描き、波頂部直下に「の」の字文を配する。88～90は堀之内2式期から系譜を引く大型の鉢形精製土器である。88は摺鉢形を呈する比較的大きな個体で、口縁直下の内面に沈線を多段に施し、要所に「の」の字文を配する。89は口縁部が緩やかながら四単位の波状となる内面に刻みが施された並行沈線が多段に配されている。90は両端を波頂部とする舟形の鉢である。長辺側に位置する波底部には長台形の



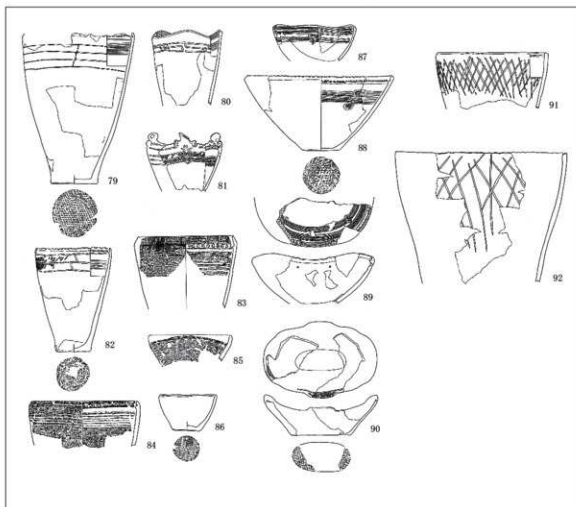
第4図 加曾利B1～B3式土器（縮尺1/8）

70～73小丸遺跡1・2号住居跡：加曾利B1式、74～78華藏台遺跡32号住居跡：加曾利B2～B3式

突起が付けられ、内面側に縄文が施される。91と92は斜行沈線を格子目状に施した粗製の深鉢形土器である。91は口唇部の内面側に沈線を巡らせ、92は口唇部に刻みを施している。

子易・大坪遺跡J13号敷石住居跡：加曾利B1式（第6図93～98）

J13号敷石住居跡は敷石と張り出し部、外周に周堤礫を有する敷石住居跡である。柱穴列に沿って小礫の集中が認められる「環礫方形配石遺構」でもある。遺構の遺存状況は良好で出土遺物も多いが、器形が復元可能な個体は限定される。95と97の鉢形土器は床面に相当するレベルより下位の出土で、報告では埋甕（埋設土器）としている。94は周堤礫上の出土で、厳密には住居範囲外からの出土というべきである。93・96・

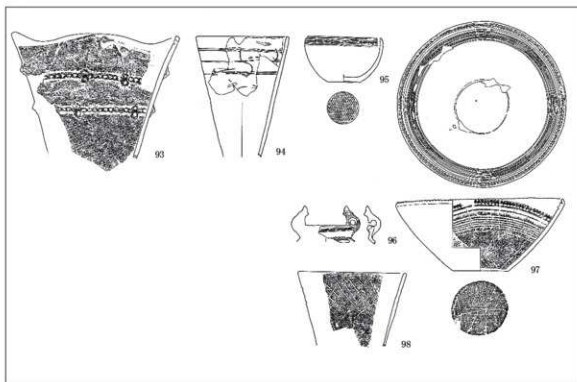


第5図 加曾利B1土器 (縮尺1/8)
79～92原口遺跡J13号敷石住居跡：加曾利B1式

98の出土状況はわからない。93は報告者によってB1式とされている。口縁部の8の字状貼付文と紐線文の消失および無単位の横帯文の組み合わせの成立後(下北原遺跡第14号住居跡の一括資料を堀之内2式とする)を加曾利B1式とする本稿の立ち位置からすると、前段階に位置付けるべき土器である。94は外開きの器形に口縁部直下の外側に横位の沈線による区画を配する精製深鉢形土器である。縦位置にS字状の粗雑な区画線を入れている。堀之内2式末～加曾利B1式の中でどこに位置付けるべきか判断に迷う土器でもある。95は上述した通り、埋甕(床面への埋設土器)とされた小型精製の鉢形土器である。口縁部外面に沈線を多段に配する。96は加曾利B1式の注口土器口縁部である。97は原口遺跡J13号敷石住居跡でも見てきた堀之内2式期から系譜を引く大型の鉢形精製土器である。器形は播鉢形を呈し、口縁部は非常に細やかな波状となる。口縁直下の内面に沈線を多段に施すとともに、要所に「の」の字文を配する。98は斜行沈線で格子目を描く粗製の深鉢形土器である。外開きの器形を呈し、推定径が20cmと比較的小型である。

華蔵台遺跡29号住居跡：加曾利B2～B3式 (第1図13～35、第2図40～62)

加曾利B2～B3式期の共伴事例として華蔵台遺跡29号住居跡の事例を掲げる。実は加曾利B2式前半段階の良好な共伴事例をここに掲げることが出来なかった。本来であれば小丸遺跡28号土坑の57や原口遺跡J13



第6図 加曽利B1土器 (縮尺1/8)
93～96子易・大塚遺跡J13号敷石住居跡：加曽利B1式

号敷住居跡出土の81のような口縁部に3単位突起を持つ精製深鉢の系譜に連なり、突起が簡略化されるとともに頸部が括れた土器や、平口縁の精製深鉢の系譜にある縄文と沈線による区画間の分離がより顕著なものとなる土器を、ここに示せてはいない。

本住居跡は、既述の華藏台遺跡16号住居跡とは別となる同集落遺跡の南縁斜面に臨む場所にある住居跡集中重複箇所所在する。ここは遺跡内でも著しい住居跡の建て替え・重複が見られる場所の一つであり、本住居跡自体25号・26号住居跡と重複するが、出土土器はある程度の幅を見せながらも比較的まとまった様態を示す。これは例えば、すぐ近くにある28号住居跡が復元土器を含めた多数の遺物を有しながら、その内容が堀之内2式から加曽利B1式・B2式にわたる非常に複雑な様相を呈するのとは異なる。13は胴部が括れ区画内に縄文を施す精製深鉢形土器である。胴部の単位文となる「い」の字の縦短沈線が認められ、ここに掲げた29号住居跡出土の加曽利B1式土器としては最も古く、加曽利B2式前半期と判断されるが、口縁部はごく一部しか遺存しておらず、平口縁や波状口縁となるものか、突起部を有するか否かはわからない。14～17やあるいは40は加曽利B2式後半以降に位置付けられる。14と16は沈線を上段左下がり、下段右下がりの斜位に施し、間を平行する沈線で画して無文帯とした深鉢形土器、15は矢羽状に施した沈線を上下に配し、沈線で区画した間を無文帯にするもので、ともに胴部の括れた外開きの器形となる。17は胴部に括れを有し、斜行する沈線を矢羽根状に配した深鉢形土器である。口縁部の形状は紐線文系土器に近く、半根製土器と位置付けられるかもしれない。40は算盤玉形の鉢形土器である。前述した斜位沈線を矢羽根状に施した土器(14～17)と合わせて当該段階以降を特徴づける土器とされる。鋭く内折した胴部に外開きの口縁部が立ち上がっている。算盤玉形の胴部上半に弧状の区画による磨消縄文が配され、胴下半には無文帯を挟んで矢羽根状の斜行沈線が配されている。41は口縁部に斜行沈線を、無文の区画を挟んだ下半に弧状の沈線を多重に施す土

器である。41はその形状から脚付土器になる可能性が高い。42は斜行沈線が格子目状に重ねられた鉢である。43も鉢形土器である。41・42が口を大きく外側に開くのに対し、43はやや内傾気味に立ち上がっている。上下に対になった弧状沈線による区画に縄文を充填する磨消縄文となる土器で、本図には示していないが同じ段階の3単位の突起を有する精製深鉢形土器や、やはり縄文を施す平口縁の精製深鉢形土器と共通する文様である。

18～22・25～27は加曽利B3式である。18～20は3単位の突起を有する精製深鉢形土器の系統上になる土器である。胴部には磨消縄文ではなく矢羽根状の斜行沈線を配している。21も同様のものだが、突起は著しく形骸化している。22は後述する25同様の波状口縁となるものである。口縁部に縄文を、胴部の括れから上に斜行する沈線を矢羽根状に配する。また同下半は無文となる。23は14～17同様に斜行する沈線を矢羽根状に配するものである。どこに置くか迷う土器であるが、口縁部に2本の沈線を引き縄文を施す点が22・28に共通することなどを後出の要素として、14～17よりも下段に置いた。24は胴部の括れよりも上側を無文、下側に地文として縄文を施し、さらに横位の沈線を多段に重ねた土器である。

25はおそらく5単位の波状口縁となる精製深鉢形土器である。胴部は大きく括れる。上下に入り組み状に対置させた弧状沈線間に縄文を充填させた磨消縄文を施す。26は胴部の括れから口縁に向けて傘状の精製土器である。上下に向かい合う弧状の沈線を連結させ、間を磨消縄文とする。25と26はこれまでの系統にはなく、当該段階で出現する土器であり、次段階の曽谷式に引き継がれる系統でもある。27は刻みを施した口縁部にコブ状の突起を配した深鉢である。胴部には弧状沈線による区画内に縄文を施し、磨消縄文とする。28は口径40cmを超える大形の土器である。口縁部は波状となり、おそらくは波頂部が5単位となるものと想定される。口縁部に沈線と縄文を添わせ、波頂部に円形の貼付文、波底部に弧状の貼付文を配する。また胴部の屈曲から上には縦位の蛇行沈線をやや間隔をあけて連ね、下に斜行沈線を連ねる。斜行沈線の間隔は14～17あるいは25に比較して広い。30・31は斜行沈線を格子目状に配するものである。30は地文に縄文を施した上に、胴部の括れに2本の沈線を配して沈線間を磨り消し、さらに斜位の沈線を格子目状に施している。32～34は小型の鉢形土器である。32は内側に屈曲し、口縁部と屈曲部に縄文、また同じく屈曲部に刻みを、下半に矢羽根状の斜行沈線を施したものである。33は口縁部が小さな波状の連続で構成される。34は丸底の鉢で、口縁部はわずかながら波状を呈する。沈線による区画内に縄文を施している。

44～48・49～52は所謂細線文系の粗製深鉢形土器である。縄文を地文とした上に条線を施し、口縁部ある胴部の括れに押捺した粘土紐を貼りつけたものである。49は大型の粗製深鉢で、肥厚した口縁を斜めに切り、広めの押捺を施したものである。胴部には縦位と斜位の沈線を配するが、縄文等の施文は行われていない。これらの粗製土器は本住居跡から出土する加曽利B2～B3式に概ね伴うものとしてよいだろう。

華藏台遺跡32号住居跡：加曽利B2～B3式（第3図64～69、第4図74～78）

加曽利B2～B3式期の共伴事例として同じく華藏台遺跡32号住居跡の事例を掲げる。本住居跡も既述の華藏台遺跡29号住居跡同様に、集落南縁斜面に臨む場所にある住居跡の集中重複箇所所在する。本住居跡は著しい重複が観察される31号住居跡（堀之内2式期）と重複し、これを切る位置にある。出土土器は堀之内2式期の混在もあるが、加曽利B2～B3式期の比較的多くまとまった様態を示す。

64は胴部が括れ、区画内に縄文を施す精製深鉢形土器である。区画は一部が弧線状をなし、単位文となる「い」の字状の縦位短沈線を連ねているのが観察できる。口縁は平口縁となるが、突起の有無は確認できない。

華藏台遺跡29号住居跡出土の13と同じ段階に置くことが出来るだろう。65は報告書での記載は無いが、比較的大きな鉢形土器になるものと思われる。2本の沈線により弧状の区画を作り、内部に縄文を充填する。66は胴部の屈曲する鉢形土器である。口縁部に小さな突起を有し、突起下の「い」の字状の単位文に区画の沈線が入り組んだ形状をなす。64と同じく加曽利B2式の古い段階である。

67～69は加曽利B3式である。67は華藏台遺跡29号住居跡出土の27と同じく、口縁部にコブ状の突起を配した深鉢である。胴部には弧状沈線による区画内に縄文を施し、磨消縄文としている。68は大型の鉢形土器で、口縁部に瘤状の突起を配し、胴部には浅い沈線で文様を描く。突起下に緩いS字に逆S字を重ねた単位文を配し、さらに横位の沈線を重ねている。69は斜位の沈線文を格子目状に配した深鉢形土器である。胴部に括れを持つ。74～76は頸部と胴部が屈曲する算盤玉形の鉢形土器であり、加曽利B2式～B3式に位置付けられる。算盤玉形の胴部上半に弧状の区画による磨消縄文を配する。76は胴部下半に斜行沈線を確認できる。77は紐線文系土器である。口縁部と括れ部下の肩の位置に指頭瓦痕を施した隆帯を配し、地文の縄文上に上段は横位の、下段は斜位の沈線を連ねる。78は無文の深鉢である。

小括

今回は、住居跡を中心とした遺構からの一括出土事例に基づく加曽利B式期の編年構築を目指しながら、冒頭述べたように各段階を通じた良好な共伴事例には必ずしも恵まれず、一括出土事例各種土器を、ある程度時間軸に沿った形で並べたものにとどまった。特に加曽利B1～B3式の各段階で認められる3単位突起を有する精製深鉢形土器（57・80・18～20）の系譜をきちんと示すことが出来ず、各段階の土器群の様相についてもその十分な内容を示すことが出来なかった。加曽利B式土器は土器の器形や文様の変化に加え各系統の出現消長がその画期におおいに意味をなすとしてよいだろう。文中でもふれた斜行沈線を配する精製土器の一群（14～1741・42）や算盤玉形の鉢（40・74～76）あるいは5単位の波状口縁深鉢（25）や胴部の括れから口縁に向けて窄んだ広口壺状の精製土器（26）などの共伴事例についてより詳細に詰めていく必要がある。また、東京湾沿岸部に位置する県東部と相模湾側の県央、また県西部での地域的相違についても言及出来ていない。粗製土器は県東と県西で明らかに傾向が異なるほか、堀之内2式期から系譜を引く大型の浅鉢形土器にもその共伴に東西差があるのか確認する必要があるかと思われる。全県域を通じて加曽利B1式の資料に比較的恵まれながら、加曽利B2式以降の資料が貧弱なものも作業を進める上でのネックとなっている。冒頭の繰り返しとなるが、次年度以降の作業において、単体出土の資料や他地域の土器を参考資料として掲げ、また足りない部分については型式学的な操作を通じて編年案を構築する必要がある。

(小川岳人)

【引用参考文献】

- 山内清男 1939 (再版1967) 『日本先史土器図譜』第Ⅲ・Ⅳ集 先史考古学会
 安孫子昭二 1971 「加曽利B式土器の変遷」『平尾遺跡調査報告1』南多摩郡平尾遺跡調査会
 安孫子昭二 1981 「関東・中部地方」『縄文土器大成 3 後期』講談社
 大塚達朗 1983 「縄文時代後期加曽利B式土器の研究(1) - 最近の成果の検討と新たな分析 -」東京大学考古学研究室研究要2号
 大塚達朗 1984 「寿能泥炭層遺跡出土の加曽利B式土器の様相」『寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書』埼玉県教育委員会
 百瀬長秀 1984 「羽状沈線文をもつ土器の系統と展開」長野県考古学会誌49
 大塚達朗 1986 「型式学的方法-加曽利B式土器」季刊考古学17号

- 安孫子昭二 1988・1989 「加曾利B式土器の変遷と年代（上）・（下）」東京考古6・7
- 西田泰民 1989 「堀之内・加曾利B式土器様式」『縄文土器大観4 後期・晩期・続縄文』小学館
- 大塚達朗 1989 「加曾利B式三細別における祖語の解消—学史的的理解とは何か—」先史考古学研究第2号
- 大塚達朗 1990・1992 「失われた書物を求めて（1）（2）～加曾利B式研究から見た昭和考古学～」利根川11・13
- 秋田かな子 1994 「加曾利B式注口土器の研究（予察）—王子ノ台遺跡出土の注口土器から—」東海大学地内遺跡調査
団報告4
- 大塚達朗 1996 「加曾利B式土器」『日本土器辞典』大川清・鈴木公雄・工楽善通編 雄山閣
- 縄文セミナーの会 1996 『第9回縄文セミナー後期中葉の諸様相 資料』
- 安孫子昭二 1998 「加曾利B式土器資料」『山内清男考古資料9—縄文後期加曾利B式・中国地方の陶棺・下総国分寺・
尼寺資料—』奈良国立文化財研究所
- 秋田かな子 1998 「加曾利B式土器の構造変化システム—南関東西部における様相をふまえて—」東海史学32号
- 秋田かな子 1999 「関東地方後期（加曾利B式・曾谷式）縄文時代10号
- 秋田かな子 2002 「加曾利B2式鉢形土器の性質—型式内位置に見る諸現象から—」『日々の考古学』東海大学考古学教
室開設20周年記念論文集編集委員会
- 大塚達朗 2004 「『の』の字単位文考—加曾利B1式の理解として—」縄文時代第15号
- 秋田かな子 2005 「堀之内2式土器 加熱系土器 製作の一断面—関東西部における表示性希薄土器の存在形態—」土
曜考古29号
- 秋田かな子 2006 「関東地方後期前・中葉にみる土器文化の展開—形式の変化と維持をめぐって—」『縄紋社会をめぐる
シンポジウムIV—土器型式をめぐる諸問題—予稿集』縄紋社会研究会・早稲田大学先史考古学研究所
- 石井 寛 1999 「小丸遺跡 港北ニュータウン埋蔵文化次調査報告25
- 長岡文起 2002 「原口遺跡 III」かながわ考古学財団調査報告 134
- 石井 寛 2008 「華蔵台遺跡 港北ニュータウン埋蔵文化次調査報告41
- 天野賢一・大塚健一・三瓶裕司他 2013 「子易・大坪遺跡 子易・町屋裏遺跡」かながわ考古学財団調査報告292

弥生時代後期堅穴住居の研究（8）

弥生時代研究プロジェクトチーム

はじめに

2016（平成28）年度から弥生時代後期堅穴住居の研究と題して、神奈川県立埋蔵文化財センター時代の『かながわの考古学』第4・5集において「弥生時代堅穴住居の基礎的研究」として集成・分析を行って以降の、1993～2015年度に発掘調査報告書が刊行された遺跡の後期～古墳時代初頭の堅穴住居について集成を行ってきた。最終的に142遺跡・4,769軒の堅穴住居についてデータ化することができた。これまで、各年度に集めた川崎市域、横浜市域、三浦半島・湘南、県央、県西、西湘の各地域の分析を個別に行ってきたが、今回は最終的な県域全体の分析を試みる。本来は、過去の集成データとの統合作業を経て総合的な分析とすべきところではあるが、およそ30年前に行った集成は紙媒体のカード記録として神奈川県立埋蔵文化財センター図書室に保管されており、今回これらのデータ化作業を実施することができなかった。このため、分析内容は今回集成分のみに限った客観的事実が中心とならざるを得ず、また、軒数の多さから面積については分析を行うことを断念している。対象としなかった中期宮ノ台期以前の追加集成を含め、今後の課題として残す部分が多くある。しかしながら、過去の集成件数は後期～庄内期あわせ1,561件と少なく、今回蓄積したデータ件数は単独で分析するに遜色ないものであり、集成開始当初の目的は達せられたと判断し、本論をもってこのテーマについて一旦完了とする。

1. 帰属時期別住居軒数

帰属時期：対象とした142遺跡の堅穴住居跡は4,769軒である。これらの帰属時期は、後期：3,410軒、庄内期：575軒、帰属時期不明：784軒（中期～後期21軒、中期～古墳時代前期1軒、後期～古墳時代前期431軒、不明331軒）である。分析の対象とした堅穴住居跡は、後期および庄内期に帰属するのものとした。各対象遺跡と住居軒数および地域ごとの分析は弥生時代後期堅穴住居の研究（2）～（7）（弥生時代研究プロジェクトチーム2018～2023）を参照されたい。

2. 住居形態など

平面形態：住居の平面形態について、前回の集成では、後期に入ると隅丸方形のものが約75%と統一される傾向にあり、庄内期では方形化が顕著であると報告されている。

今回の集成では、平面形態が不明なものを除いて、後期2656軒、庄内期489軒の平面形態を確認した（第1図）。後期では、隅丸（長）方形が1697軒：63.9%と全体の半数以上を占めていて、楕円形（楕円形と推定されるもの含む）の640軒：24.1%を足すと全体の88.0%である。地域別に見ても、県下全域で隅丸（長）方形と楕円形が最も多い傾向が顕著に認められ、後期では隅丸の平面形態が主体を占めていることがあらためて確認された。次いで、（長）方形が188軒：7.1%、円形が123軒：4.6%と、県内各地域において一定数が存在していて、特に円形のものは県央で30軒、県西では68軒とやや多く確認されている。

庄内期では、隅丸（長）方形が359軒で73.4%と全体の過半数を占めていて、（長）方形の77軒：15.7%を足すと全体の82.2%である。地域別に見ても、県下全域で隅丸（長）方形が最も多いことが確認され、この

時期には平面形態が方形（長方形）化していることが顕著に表れている。後期に比較すると、楕円形は43軒：8.8%と大幅に減少しているが、西湘では楕円形が10軒確認されているため、今後の資料数の増加を待って再確認する必要がある。

方形指数：住居形態の変化について、住居の隅の部分の丸みの度合いを客観化するため、指数化を試みたものである（比田井1991）。四隅それぞれで指数を算出し、その平均をその堅穴住居の指数とする。指数0は堅穴住居の隅が円、指数100は隅が直角を示すこととなり、指数があがるにつれ方形化が進むことを示している。

前回の集成では、時期別割合について、後期では指数10～40未満が主体を占めていて、庄内期では指数20～70未満がほぼ横並びで、集中することなく幅広い分布が認められるとした。

今回の集成では、後期874軒、庄内期232軒の指数を算出した。時期別の比率（第2図）では、後期では指数20～30未満をピークとして、その前後の10～20未満と30～50未満が比較的多く、それらの合計は63.2%と半数以上を占めている。庄内期では、10～70未満の広い範囲で比較的高い傾向が認められるが、40～50未満と50～60未満がどちらも20%近い数値を示している。全体的には、後期は10～50未満が、庄内期では40～60未満を中心とする傾向になることが認められ、前回の集成に近い結果となっているが、事例の増加により地域ごとの様相に違いが見えてきている。

地域ごとに見てみると、後期の横浜市区・県央では40～70未満が多く認められ、三浦半島と湘南では10～50未満に集中する傾向がみられる。しかし県西では、0～40未満に集中する傾向がみられ、特に0～30未満が多い点は注目される。庄内期では、横浜市区では40～70未満に、県央では30～50未満に多く認められるが、その他の地域では10～70未満の間に平均的に分布する傾向があるように見える（第3・4図）。

なお、後期と庄内期のどちらにも、0～10未満の円形に近い住居が一定数存在している。

長短率：長短率は、住居の長軸の数値を短軸の数値で除し、それに100を乗じたものである。その値が大きくなれば、長軸と短軸の差が大きくなり長方形に、小さくなれば正方形に近づき、最低の値は100となる（弥生時代研究プロジェクトチーム1995）。前回の集成では、須和田期から庄内併行期までの平均値の推移を示し、宮ノ台期から新しくなるにつれ、数値が小さくなる傾向が確認された。

今回の集成では、後期は847軒を算出し、基本統計量は最大205.6（外れ値となるため図には反映していない）、最小61.1、平均113.6、中央値111.5である。庄内併行期は211件を算出し、基本統計量は最大163.8、最小75.7、平均111.4、中央値110.2である（第5図）。前回の集成では、平均値が後期で113.0、庄内併行期は110.9であり、今回の結果と大きな差は認められない。

第6図に、地域ごとの平均値を示した。湘南・三浦半島では後期の数値が低く、庄内併行期には逆に高くなる傾向が認められた。また、後期の県央・県西・西湘では、県東部の川崎市・横浜市・湘南・三浦半島よりも数値が高い傾向が認められる。庄内期では、件数の少ない川崎市・西湘を除くと、110～115前後とほぼ一定した比率にあり、方形化する傾向を示すとも考えられる。なお、数値100の住居は、後期の横浜市区で8件、湘南で4件、三浦半島で1件、県央で10件、県西で7件の計30件である。庄内併行期では、川崎市・横浜市・県央・県西・西湘で各1件、計5件である。（六戸）

主軸方位：主軸方位は、主として主柱穴配置および奥壁側へ偏った炉と入口施設を軸として決定されるが、報告によっては堅穴住居が完存していない場合に炉と方形基調の壁面の方向あるいは検出された柱穴等を元になっている場合があり、若干の不確定要素が混入している。後期2127軒、庄内期411軒について集計し、第

7図にグラフで示した。0が真北を示し右90度が東・左90度が西となる。大部分の竪穴住居がN-40°~50°-Wを中心とした北西方向を主軸とし、入口を南東方向へ向けて構築される傾向にあることがわかる。また、真北を挟んで北東方向に主軸を持つ竪穴住居も一定程度存在しており、地域的には県央地域に多く、これらの傾向は後期・庄内期に共通している。グラフに表れにくいが入りが東西方向より北を向く竪穴住居が後期では全体の3.8%、庄内期では5.7%存在し、県央地域を中心に確認される。また、短軸方向に主軸を持つ竪穴住居は、後期で28軒(川崎市域1・三浦半島4・湘南5・県央8・西湘7・県西3)・1.3%、庄内期で15軒(横浜市区5・湘南2・県央3・西湘4・県西1)・3.6%存在する。(新聞)

主柱穴：今回の集計は、前々号までに行ってきた各地域の集計表に基づいて、神奈川県内全体の集計を行った。集計の方法はこれまでに示したとおり、住居跡での主柱穴本数が確認できたものについて集計しており、完形ではない住居跡についても柱穴配置により元の柱穴数が推定可能な場合には、推定本数で集計したものである(第8図)。後期では集計総数1458軒中、主柱穴4本のものが1224軒で84%を占め、次に主柱穴数0本のものが166軒で11.4%である。庄内期では総数330軒中、主柱穴4本のものが289軒で87.6%を占め、次いで主柱穴数0本のものが25軒で7.5%である。後期も庄内期も主柱穴4本が84%以上と大多数を占め、次に多い主柱穴0本の10%程度とは大きな開きがある。後期も庄内期も、主柱穴数はこの2種類で95%以上であり、時期別には同様の傾向と言えるが、地域的には主柱穴数0本が極めて少ない県東部(川崎、横浜、三浦)と、主柱穴数0本が比較的多く25~30%程度と一定の割合を占めている県央部(県央、湘南)、10%程度でその中間の様相と言える県西部(西湘、県西)と、大きく3地域に特徴が分かれるようである。各地域の集計を参照していただきたい(弥生時代研究プロジェクトチーム2017~2023)。なお、主柱穴数が1~3本については、上屋構造と関わるので柱穴配置の有り方とともに検討が必要である。(池田)

3. 住居内施設について

炉：炉は、屋内での煮炊きや暖を取るための施設であり、柱穴と並んで竪穴住居の最も基本的な施設の一つである。住居内の中央やや奥壁寄りに設置されることが多いが、その構造にはいくつかの種類が確認されてきた。今回の集成では、以下の分類に従って種別毎の集計を行った。床面の一部を皿状に掘りくぼめただけの地山を火床とするものを「地床炉」、火床に粘土を敷いたものを「粘土板炉」、炉の火床に接して一方に細長い礫(枕石)を添えるあるいは埋め込むものを「枕石炉」、同様に棒状等の粘土塊を添えるものを「枕粘土炉」、土器片を添えるものを「土器片炉」、として集成した。

集計では、炉が複数確認された竪穴住居が一定数あるが、同一種別の炉である場合は1件とし、種別が異なる場合はそれぞれ1件とした。このためデータ件数は竪穴住居数とは一致しない。データ件数は後期1927件、庄内期329件である(第1表)。

第9図に集成された炉形態の時期別構成比を示した。前回の集成では地床炉の割合が宮ノ台期75.1%、後期84.6%、庄内期90.2%となり、宮ノ台期以降10%程度ずつ地床炉の割合が増加する傾向が明瞭に認められたが、今回の集成では地床炉が80%前後、粘土板炉が約2%、枕石炉・枕粘土炉・土器片炉といった支持物と考えられる物体を設置する炉の一群が15~18%と、後期と庄内期での顕著な構成比率の変化は認められなかった。一方、集成件数が多く、前回の集成で粘土板炉の実数が他時期に比して圧倒的に多かった後期について水系別に構成比を第10図に示した。横浜・川崎および県央の相模川周辺から西部地域は地床炉割合がほぼ80%以上となり、枕石炉を中心とした支持物を設置する炉形態が残りる傾向がほぼ共通するが、藤沢市を中心とする境川・引地川水系では、粘土板炉が26.6%と目立って多く地域的な偏在が顕著である。ま

た、三浦半島は枕石炉の比率が50.9%と非常に高い。三浦半島では各地にある風化した露頭等から土丹石と呼ばれる比較的軟質な石材が採れ、また風化し易く再利用が難しいため、こうした条件が反映している可能性がある。逆を言えば、再利用可能な石材は抜き取られ結果として地床炉として認識している可能性があり、他地域でも枕石炉の構成比率はもっと高いのかもしれない。今回の集成では、粘土板炉に枕粘土が付随している藤沢市稲荷台遺跡群C・D地点の3・24号住居の例や、粘土板炉に枕石が付随する海老名市本郷遺跡KA地区12号住居の例があり、今回は炉の種類として火床の構造の別である地床炉・粘土板炉等と枕石炉等を同列に扱ったが、区別して集成・検討することが今後の課題だろう。(新聞)

入口施設：弥生時代の堅穴住居では、堅穴部の平面形態と支柱穴（と推定されるもの）の配置、焼失事例で確認された建材の痕跡等から鑑みて、柱建ての上屋がかかけられていたものと考えられている。県内の発掘調査で確認された事例のうち、その全体がうかがえる程度に遺存しているものでは、多くの場合、支柱穴の内側の一面に、先述の炉址が設けられている。この炉の反対側にあたる壁側に小穴が1基、もしくは複数基が対になる等の状態で検出されることがあり、梯子や階段等の施設を設置した痕跡と推定される。これは「堅穴住居の奥側に炉が設けられ、その反対側の壁際に入口施設が存在する」のではないかと、という推論も影響しているが、他の側の壁付近に同様の小穴が検出される事は少なく、弥生時代後期～古墳時代初期の堅穴住居のうち、総件数の約1割～2割程度の事例で、こうした入口施設が検出されている事も事実である。

これらの施設は主として「入口穴」、または「梯子穴」などと呼ばれており、前回の集成では中期中葉から中期後葉宮ノ台期を経て、いわゆる庄内期までの事例を確認した。またその時点での、完存もしくは全貌がわかる事例では、「時期が新しくなるにつれて入口穴の無い住居の件数が増加する」傾向を指摘しつつ、他の付帯施設に比べて「入口穴が発見されにくいこともあるだろうが、住居の壁高などと関連する可能性」についても言及している。

今回集成した事例では、後期では384軒で、庄内期では119軒で、それぞれ入口穴・梯子穴が検出されている。各時代・時期の総軒数は、完存もしくはそれに近い事例だけではないので、単純に比較対象には出来ないが、総軒数に対する入口施設検出の割合は後期で11.3%、庄内併行期で20.7%であり、むしろ時期が新しい方がその比率は上昇している（第11図）。とはいえ、こうした入口施設は他の付帯施設に対して、前出のように壁高や施設そのものの構造と小穴深度の関係の変化や、住居床面における土間・床の間の存否も影響する事が想定され、現行の検出比率は今後の調査事例の増加で再び覆りかねない可能性をはらんでいる。ここでは、今回集成した事例において、後期と庄内併行期それぞれで、県内の各地域でもその検出比率には一定の傾向が認められ、入口施設の構造には小規模な地域性が存在する可能性があるという事と、県域全体の事例としては、時代・時期の変遷に伴い住居堅穴部や上屋部分の構造・規模が変化していく中で、入口施設そのものの住居における位置づけも変化した可能性がある、という事を指摘するに留めたい。(渡辺)

貯蔵穴：今回の集計では、全体で750軒の堅穴住居で貯蔵穴が確認されている。後期では615軒で貯蔵穴が確認され、そのうち38軒で複数の貯蔵穴が確認されている。複数の貯蔵穴が確認されている住居には、貯蔵穴が2基のものが30軒、3基のものが7軒、4基のものが1軒あるが、複数基ある貯蔵穴に新旧が確認されているものもあるので、住居建て替えを含めた貯蔵穴作り替えによる結果、複数基が検出されている場合があり、必ずしも複数基同時存在を示すものではない。庄内期では135軒で貯蔵穴が確認され、そのうち6軒で複数の貯蔵穴が確認されている。その内訳は貯蔵穴2基が確認されているものが5軒、3基のものが1軒である。貯蔵穴を有する住居の数は、後期から庄内期へ大きく減少し、貯蔵穴の保有率は後期の75%から庄内

期には57%へ減少する(第12図)。なお貯蔵穴を持たない住居は、後期が203軒、庄内期が100軒である。「貯蔵穴無し」の判断は、堅穴住居全体の約80%が残存している住居を対象として、貯蔵穴が確認されなければ「無し」と判断して集計した。住居の一部が調査されているだけでは、貯蔵穴無しの判断は出来ない(「有り」は可能)ため、暫定的に今回の分析にあたっての貯蔵穴が無い住居の判断基準とした。「貯蔵穴有り」については、残存度に関わらず「有り」として集計している。前回の分析(弥生時代研究プロジェクトチーム1995)において、貯蔵穴を持つ住居の割合は、中期後半宮ノ台期以降、時期が新しくなるにつれて減少する傾向が指摘されているが、今回も同様の傾向を見てとることが出来る。

続いて、堅穴住居の貯蔵穴には、その周囲に周堤などの区画施設が付随して検出されることがあるが、後期では貯蔵穴がある住居615軒のうち130軒で周堤を有する貯蔵穴が確認され、1軒で周溝を有する貯蔵穴が確認されている(三浦半島の横須賀市船久保遺跡Y2号住居跡)。分析の上では周溝を有する貯蔵穴は、周堤を有する貯蔵穴に含めて取り扱った。庄内期では、貯蔵穴がある住居135軒のうち、40軒で周堤を有する貯蔵穴が確認されている。貯蔵穴を持つ住居は後期から庄内期にかけて減少するが、周堤を有する貯蔵穴の割合は、全体としては後期よりも庄内期に若干増加している(第13図)。また後期と庄内期を通して横浜市区と三浦半島に、周堤を有する貯蔵穴の割合が比較的高いことが認められる。但し、分析資料数の地域的な偏りが著しいことに留意するべきであろう。全体的に、貯蔵穴を持つ住居の検出数は全容が把握できる状態の住居数が多い地域に偏っていることが窺われ、住居の発掘調査軒数とは必ずしも比例していない。発掘調査された住居数が多くても重複が著しい遺跡では、分析母数として有効な残存度の住居数が限られることがあるため、分析母数が極めて少ない場合、「比率」に影響している可能性がある。現状では、貯蔵穴の周堤の有無については全体的傾向を指摘するに留め、地域別傾向を判断するためには、もう少し資料数が充実したうえで検討が必要があると思われる。(池田)

周溝: 周溝について全周・部分・無しの3種類に分類し、流域ごとの後期と庄内期を比較した(第14図)。なお、報告書から周溝の有無が読み取れない住居については今回の分析から除外した。

地域ごとによって傾向は異なる。多摩川流域では、庄内期になると周溝を持つ住居の割合は減る。鶴見川流域、大岡川・帷子川流域、相模川流域では後期と庄内期の割合に差はほとんどない。三浦半島では周溝をもつ住居の割合はほとんど変化しないが全周に周溝のある住居の割合が若干高くなる。柏尾川流域では、後期では周溝をもたない住居が多かったのに対し、庄内期には部分的な周溝をもつ住居の割合が高くなっている。境川では、周溝をもつ住居の割合が庄内期になると高くなる。金目川では、周溝をもつ住居ともたない住居の比率に変化は見られないが、周溝が全周なのか、部分的なのなのかの比率が後期と庄内期で逆転する。酒匂川流域は周溝をもつ住居の割合が後期と庄内期を通じて低く、庄内期には全周の周溝をもつ住居はなくなる。

以上のように、地域ごとにまとめてみたが全地域を通した傾向というのではない。流域によって異なった変化をしている。庄内期は今回の分析の対象となる住居数が少ないため、傾向を語るに不十分なサンプル数かもしれない。今後の調査数の増加に期待したい。(吉田)

4. 更新・廃絶などについて

拡張: 住居の重複とは、主柱穴や炉が重複するものや、周溝や周壁の一部または全周が増築されるなどの痕跡が認められるものを指す(弥生時代研究プロジェクトチーム1995)。前回の集成では、須和田式から庄内期の完形住居における拡張の有無を示し、時期が下るに従い、その割合が減少する傾向を確認した。

県内の完形住居における拡張の有無を時期的に見たのが第12図である。各時期における拡張の確認できた住居の割合を見ると後期は12.1%、庄内期11.3%と後期が若干優位である。前回の集成では後期は7.4%、庄内期で3.2%のため、資料の増加に伴い、住居の拡張事例が増えた結果だと考えられる。

第16図は水系ごとに示した住居の拡張の割合である。鶴見川水系・境川水系・三浦半島では後期に比べ、庄内期に拡張する割合が大きくなるが、他の地域では拡張がなくなるないしは、減少傾向になる。住居の拡張は複数行う事例も見られ、後期は鶴見川水系で2例、庄内期は鶴見川水系で3例認められた。(齊藤)

焼失住居：今回集計した神奈川県内における弥生時代後期の堅穴住居総軒数に対する焼失住居の割合は3410軒中210軒(6.2%)である。地域別にみると横浜・川崎市域で637軒中48軒(7.5%)、三浦半島で401軒中20軒(5.0%)、湘南で311軒中46軒(14.8%)、県央で779軒中45軒(5.8%)、西湘で1165軒中4軒(0.3%)、県西で117軒中47軒(40.2%)となる。焼失住居の割合が最も高いのは県西で、次いで湘南、横浜・川崎市域となる。西湘では堅穴住居軒数が1165軒と地域別では最も多いが、焼失住居軒数は非常に少なく、堅穴住居総軒数と焼失住居軒数との間に比例関係はないようである。

次に今回集計した神奈川県内における庄内期の堅穴住居総軒数に対する焼失住居の割合は575軒中67軒(11.7%)である。地域別にみると横浜・川崎市域で146軒中25軒(17.1%)、三浦半島で35軒中5軒(14.3%)、湘南で60軒中9軒(15.0%)、県央で126軒中14軒(11.1%)、西湘で160軒中2軒(1.3%)、県西で48軒中12軒(25.0%)となる。焼失住居の割合が最も高いのは後期と同様に県西で、次いで横浜・川崎市域、湘南となる。西湘では後期の傾向と同様に最も割合が低くなっている。県西では後期と比較して焼失住居の割合は減少するものの、地域別では最も焼失住居が存在する割合が高い。また、庄内期は県内全体で焼失住居の割合が増加傾向となる(第17図)。

前回の集成では後期および庄内期における堅穴住居総件数に対する焼失住居の割合はほぼ同じ傾向であったが、今回の分析では後期と比較して庄内期に焼失住居の割合が県内全体で増加する傾向となった。

今回の集計作業を通じて得られた神奈川県内における時代別、地域別の傾向や動向の要因については、より詳細に焼失住居そのものの分析・検討を行う必要があり今回は言及しえないが、定量的な集計作業を通じて傾向や動向を把握することで、検討すべき課題と探るべき要因をある程度抽出できることが示せたのではないだろうか。(戸羽)

5. まとめ

財団が発足して間もなく県内の弥生時代の堅穴住居を集成してから30年が経過した。この間の調査事例の増加は著しいものがあり、再度の集成の必要性が以前より指摘されていた。なかでも、後期以降の堅穴住居の調査事例の増加は目を見張るものがあり、今回、1993年度以降に発掘調査報告書が刊行された遺跡の弥生時代後期～庄内期の堅穴住居の集成を行った。各項目についての分析は、記載のとおりであるため、最後に全体的なまとめを記すこととしたい。

住居の平面形態については、報告書に記載された形状と方形指数からのアプローチを行なった。「隅丸方形」と「楕円形」の識別などは報告者の主観が入るため、このような集成時の課題として指摘されるところであるが、これを補うものとして方形指数の計測を行っている。

中期後葉の宮ノ台期の堅穴住居平面形態は、非常に均質で安定した平面形と指摘されることも多く(大島・渡辺2000)、なかでも神奈川県は埼玉県や千葉県と比較して円形傾向が強い(飯塚2003)。前回の集成でも宮ノ台期の方形指数は22.1と最も低い値となっており、後期以降徐々に方形化が進むことが示されている。今

回も後期に比べ庄内期に一層方形化が進む傾向が認められた。方形化する理由としては、上屋構造の変化及び効率的に床面積を増加させる目的などと関連づけて言及されることが多い。近畿地方や東海地方、また中部高地などでも後期に円形から方形へと変化することが指摘されており(埋蔵文化財研究会2009他)、後期・庄内期の時間幅のなかのどの段階で方形化が進むのか、他地域との詳細な併行関係も解明していくことで、方形化の理由がより解明されると思われる。

地域ごとでは、前回は三浦では他と比較すると指数の上昇がみられないという指摘があったが、今回は横浜市区などで指数が高く、県西部は低くなる傾向が指摘された。現状ではこれ以上踏み込んだ分析は困難であるが、横浜市区を中心に分布する朝光寺原式土器分布圏の竪穴住居の方形基調が強いことなどとの関係性が想定され、今後、竪穴住居出土土器の様相を踏まえての検討が必要と考える。

長短率については、前回同様、宮ノ台期から新しくなるにつれ、数値が小さくなる、すなわち正方形化する傾向が確認された。

また、今回新たに主軸方位について分析を行ったが、後期から庄内期を通じて大部分が北西方向を主軸とし、入り口を南東方向に向けるという興味深い結果を示すことができた。神奈川県内の調査では経験的に主軸は南北を向き、南側に出入口がつくられるという印象があるが、想像以上に規格化されているといえる。

また、短軸方向に主軸を持つ竪穴住居は、東海地方からの外来系の要素という指摘があるが(西相模考古学研究会2002)、数は多くはないが、地域的な偏りなく確認された。

主柱穴は8割以上が4本柱と圧倒的に多く、1割前後の主柱穴0本が続く結果となった。前段階の中期後葉段階で、既に東日本に特徴的である「主柱配列有軸対称構造」(都出1985)は成立しているが、後期以降もその主柱配置原理は継続しているといえよう。そのようななか、主柱をもたない竪穴住居が1割前後を占める点には注意を向けたい。4本柱の竪穴住居との違いは、近年県央部などを中心に低地に占拠する集落の調査事例が増加したことを反映した立地の違いによるものなのか、あるいは、4本柱と主柱穴がないものの竪穴住居の機能的な側面の違いなのか、今後検討していく必要性を感じる。

住居内施設のうち炉について概観する。県内の弥生時代を通じて最も普遍的にみられるのは地床炉である。そのため、この地床炉に石や粘土、土器片等が付属するものを中心に分析を行った。三浦で枕石炉の比率が高くなるが、項目ごとの分析で述べたように、選択される地元の石材が軟質かつ風化しやすいため再利用が困難で、残置された結果比率が高くなる可能性がある。一方、地元の石材として凝灰岩等の石材が採用されることが多いと想定される県西部では、再利用のため抜き取られた結果、地床炉の比率が高くなる可能性がある。抜き取り痕などに注意を払った調査を行う必要性を感じる。

また、前回藤沢市や伊勢原市など相模湾沿岸に多く見られることが指摘された粘土板炉であるが、今回も藤沢市を中心とする境川・引地川水系で偏在が顕著であることが指摘された。「火皿」「火皿炉」などとも称される粘土板炉は、東海地方からの影響が想定されている(仲野1980・合田2006)。弥生時代後期初頭に遺跡数が激減した神奈川県に、東海地方の複数の土器型式分布圏を故地とする集団が「貫入的」に流入してくることも無関係ではなく、遺構から広域の地域間交流をみることも可能な例といえるだろう。

入口施設については、前回の集成時に比べ検出されない事例が後期・庄内期ともに比率が高くなる一方、時期が下るにつれ入口施設のない事例が有意に増加するという傾向はみられなかった。

前回、時期が下るにつれ減少するといわれた貯蔵穴は、今回も同様の結果となった。しかし、先述したように分析資料数の地域的な偏在があり、現状の数値でそのまま水系ごとの傾向を論じることには慎重である

べきといえる。このことは周溝についても同様で、前回同様に時期が下るにつれ周溝がないものが増加するという傾向となったが、水系ごとの傾向は今後の資料の増加によっては変化する可能性もある。むしろ、中期～庄内期までに周溝をもつ事例が減っていくことから、堅穴住居の上層構造や堅穴の掘り込みの深さなども絡めての検討が重要と考える。

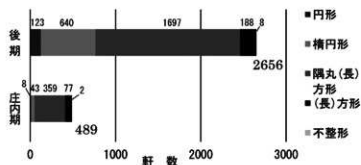
拡張については、前回の集成時には中期後葉宮ノ台期の割合が高く、時期が下るにつれ減少していくことが指摘された。今回の集成では、宮ノ台期よりは拡張の割合は低いものの、後期と庄内期で明確な差は認められなかった。住居の拡張については、集落（住居）の存続期間等に絡めての検討などがなされてきたが、近年では拡張方法が部分的か全方位型かに分けての考察、さらにそこから伐採具や堅穴住居の空間利用についての検討などもなされるようになっており（佐藤2022）、発展的な検討が期待される。

焼失住居については、前回宮ノ台期の比率の多さに注目が集まった。後期以降は全体の1割程度であり、今回の集成でも全体の1割前後と同様な結果となった。地域ごとの偏差も浮かび上がっているが、根本的な問題・課題として「焼失」理由が1つではない点があげられる。炭化物や炭化材、焼土などの情報から「焼失住居」としたもの、失火によるものなのか、争いなど集団間の緊張関係によるものなのか、あるいは堅穴住居の廃絶儀礼的な火入れなのかなど、理由は様々であることが想定される。報告書の記述からはこれら原因を特定することは困難な場合が多いが、より踏み込んだ検討をする段階に来ている印象をもった。

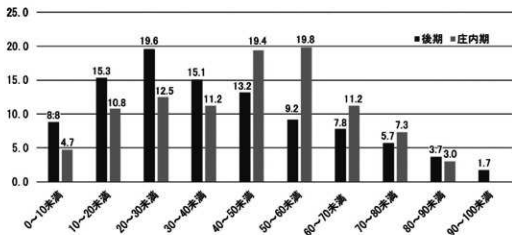
以上、いくつかの側面から集成データの分析を試みた。中期後葉から後期初頭にかけて、極端な遺跡数の減少とともに土器などの連続性が問題とされて久しいが、宮ノ台期から後期にかけての堅穴住居の系譜上のつながりについても今後の検討課題と考える。また、後期・庄内期の周辺地域との方形化に至るまでの細分時期の比較、古墳時代にかけての画期など、いくつかの課題を挙げてまとめたい。（飯塚）

【参考文献】

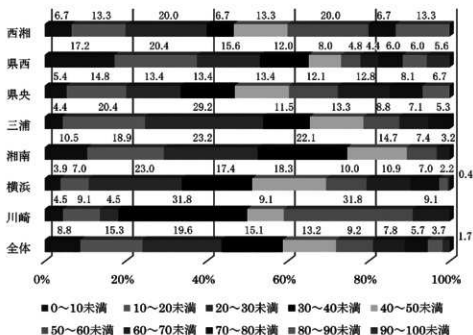
- 飯塚美保2003『宮ノ台期堅穴住居にみられる地域性』『西相模考古』第12号西相模考古学研究会
大島慎一・渡辺 外2000『第2部遺構の分析』『王子ノ台遺跡 弥生・古墳時代編』東海大学
合田芳正2006『御殿前遺跡—西ヶ原二丁目45番10号地点—』共和開発株式会社
佐藤兼理2021「拡張住居からみる弥生時代の人の移動—南関東弥生中期～後期集落遺跡を中心に—」『考古学集刊』第17号
都出比呂志1985「弥生時代住居の東と西」『日本語・日本文化研究論集』大阪大学文学部（都出比呂志1989『日本農耕社会の成立過程』に再録）
仲野紀巳子1980「弥生時代の遺構と遺物について」『中里前原遺跡—第一次発掘調査報告書—』埼玉県与野市 中里前原遺跡調査団
西相模考古学研究会2002『弥生時代のヒトの移動 相模湾から考える』六一書房
比田井克仁1991「住居形態の変遷と画期」『古代探叢Ⅲ』早稲田大学出版部
埋蔵文化財研究会2009『第58回埋蔵文化財研究集会 弥生時代後期の社会変化』発表要旨・資料集
弥生時代研究プロジェクトチーム1994・1995「弥生時代堅穴住居の基礎的研究（1）・（2）」『神奈川の考古学の諸問題』かながわの考古学第4・5集 神奈川県立埋蔵文化財センター
弥生時代研究プロジェクトチーム2018～2023「弥生時代後期堅穴住居の研究（2）～（7）」『研究紀要 かながわの考古学』23～28 公益財団法人かながわ考古学財団
和島誠一・田中義昭1966「住居と集落」『日本の考古学Ⅲ 弥生時代』河出書房新社



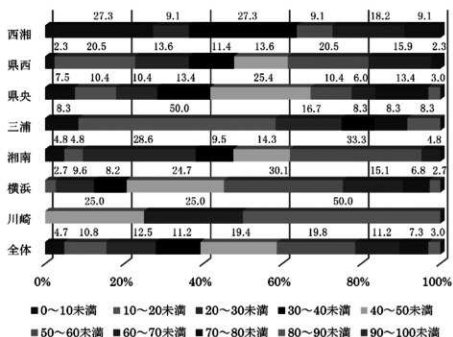
第1図 竪穴住居平面形態の時期別集計



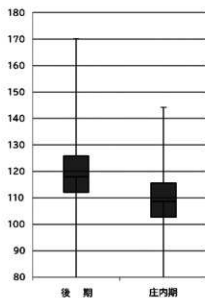
第2図 方形指数の時期別比率



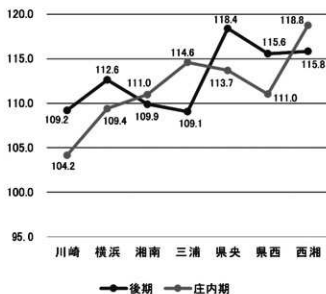
第3図 方形指数の地域別比率（後期）



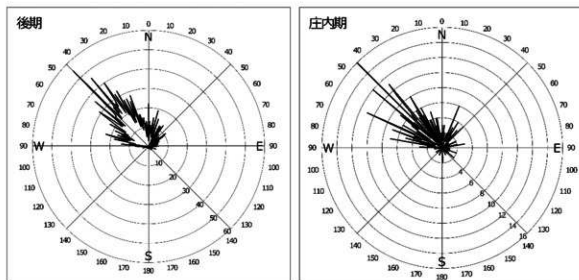
第4図 方形指数の地域別比率（庄内期）



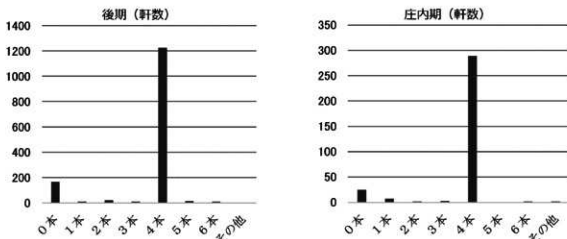
第5図 時期別全体の長短率



第6図 地域ごとの長短率（平均値）



第7図 主軸方位の分布（軒数）



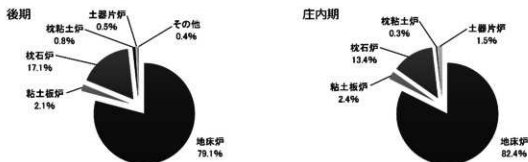
後期	主柱穴数	0本	1本	2本	3本	4本	5本	6本	その他	合計
	軒数	166	11	22	9	1224	15	10	1	1458
	割合 (%)	11.4	0.8	1.5	0.6	84.0	1.0	0.7	0.1	100.0

庄内期	主柱穴数	0本	1本	2本	3本	4本	5本	6本	その他	合計
	軒数	25	7	2	3	289	0	2	2	330
	割合 (%)	7.6	2.1	0.6	0.9	87.6	0.0	0.6	0.6	100.0

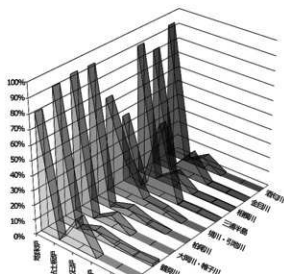
第8図 主柱穴本数

第1表 炉の形態別集計結果

炉型別	多摩川		保見川		大間川・種子川		相模川		堀川・5号川		三浦半島		相模川		金目川		渡辺川		件数計	
	後期	庄内期	後期	庄内期	後期	庄内期	後期	庄内期	後期	庄内期	後期	庄内期	後期	庄内期	後期	庄内期	後期	庄内期	後期	庄内期
地床炉	23	8	296	63	34	11	84	3	61	42	129	11	377	38	804	79	48	22	1824	271
掘土炉	0	0	1	0	0	0	1	1	21	4	5	1	2	1	10	0	0	0	40	0
穴内炉	6	0	17	2	3	0	4	0	4	11	142	13	43	4	107	13	4	1	330	44
掘土土炉	0	0	7	0	0	0	1	0	2	0	1	0	1	1	3	0	0	0	16	1
土壁穴炉	0	0	3	0	0	0	0	0	0	3	2	0	2	1	3	1	0	0	10	5
その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	7	0
未定炉数	29	5	330	65	37	11	70	4	79	60	279	28	435	42	627	93	50	23	1927	320



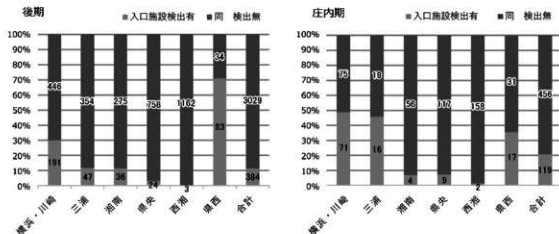
第9図 炉形態の時期別構成比率



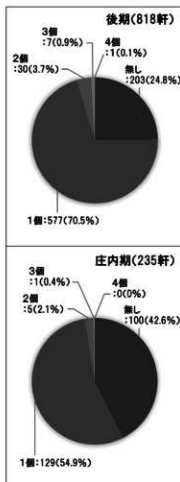
水系	地床炉	粘土板炉	枕石炉	枕粘土炉	土器片炉	その他
多摩川	79.3	0	20.7	0	0	0
鶴見川	89.7	0.3	5.2	2.1	0.9	1.8
大間川・梶子川	91.9	0	8.1	0	0	0
柏尾川	91.4	1.4	5.7	1.4	0	0
堤川・引地川	64.6	26.6	5.1	3.8	0	0
三浦半島	46.2	1.8	50.9	0.4	0.7	0
船橋川	88.5	0.5	10.1	0.2	0.5	0.2
金目川	80.4	1.6	17.1	0.5	0.5	0
瀧川	92.0	0	8.0	0	0	0

(%)

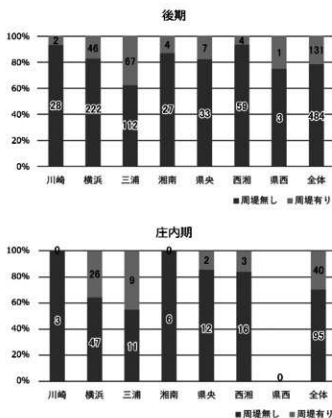
第10図 後期炉形態の水系統別構成比率



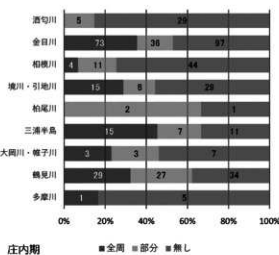
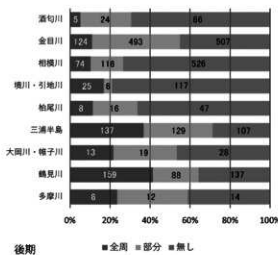
第11図 駅住居総軒数に対する入口施設検出の割合



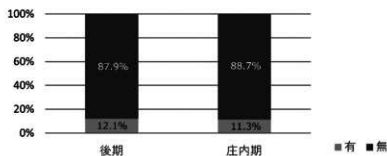
第12図 貯蔵穴の有無



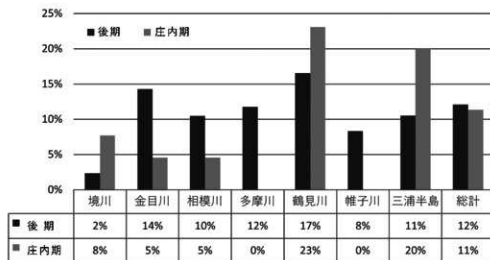
第13図 周堤を有する貯蔵穴の割合



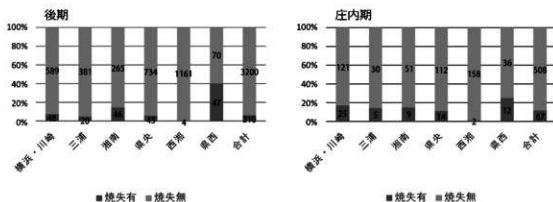
第14図 時期別水系別の周溝有無



第15図 時期別拡張の有無（完存のみ）



第16図 水系別完存住居中の拡張割合



第17図 時期別堅穴住居総軒数に対する焼失住居の割合

厚木・伊勢原・秦野の古墳調査（2）

ー近年の調査事例と周辺の古墳についてー

古墳時代研究プロジェクトチーム

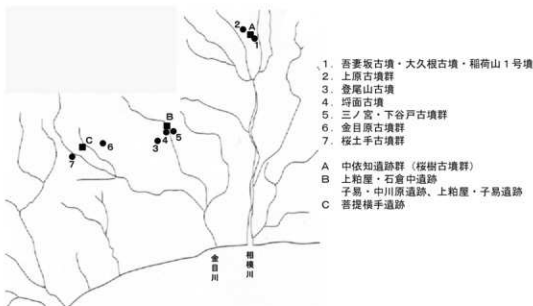
厚木・伊勢原・秦野市域では、以前から古墳時代後期の群集墳を中心に多くの古墳の調査が行われてきた。さらに近年は新東名高速道路、一般国道246号（厚木秦野道路）建設に伴い、本財団が実施した発掘調査などによって、新たな調査例が増加している（第1図）。そこでこれら3地域における新たな古墳、横穴墓および周辺の古墳、横穴墓の様相について概観し、関係性などを探る初端としたい。研究紀要28では厚木市域として中依知地区周辺における後期古墳の石室構造を概観するとともに、伊勢原市域の後期古墳を概観した。本稿では秦野市域について触れることとする。なお、新たに調査された古墳・横穴墓の名称・号数などは現段階で公表されている資料に基づく。

秦野市域の古墳

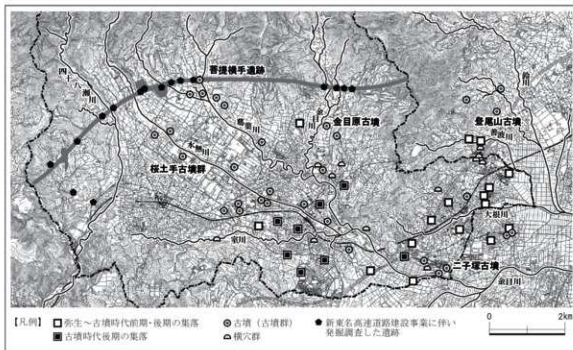
1. 秦野市域の古墳について

秦野市では近年、新東名高速道路建設事業に伴う発掘調査が数多く実施されてきた。本稿では平成28・29年度、令和2年度に5基の古墳が発掘調査された菩提横手遺跡を中心に、葛葉川流域における古墳を概観していくこととする。

新東名高速道路建設事業に伴う発掘調査が実施された地域の大半は秦野市域の北・西部に位置し、丹沢山地から延びる丘陵部に立地している（第2図）。こうした地域は過去に大規模発掘調査事例が少ない地域であったことに加え、一つ一つの調査対象範囲が広範囲に及ぶものが多かった。このため、これらの調査によって秦野市域における旧石器時代～近世の数多くの遺跡が新たに確認されたが、一方で古墳時代の遺構が確認



第1図 本財団の近年の古墳調査実施遺跡と周辺古墳



第2図 秦野市域の古墳時代集落と古墳群・横穴墓群（大上1994をもとに追記）

された遺跡は菩提橋手遺跡のみである。

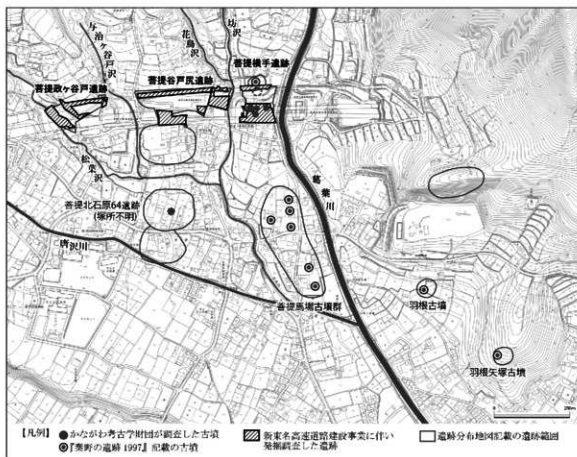
秦野市域の地形を見ると、その大半を神奈川県内唯一の盆地地形である秦野盆地が占めている。秦野盆地の北・西側には丹沢山地が連なり、南側には洪沢丘陵が東西に伸びている。盆地内は水無川、四十八瀬川、金目川、葛葉川などの河川が複雑に開析することで複合扇状地が形成されている。また、盆地南東端部（秦野市城南東部）に位置する大根地域は北金目台地・鶴巻台地からなる台地形であり、相模平野の北西部に突出する舌状台地となっている。

大上周三氏は秦野市域の古代集落の分布状況について、大根地域では台地上に偏りなく集落が分布する一方で、盆地内では扇状地の扇端部・丘陵上には顕著に集落が認められるものの、各河川上流域の扇頂部には集落が少ない傾向を指摘している（大上1994）。また、大根地域では弥生時代前期という早い段階から集落がみられるが、盆地地域における集落の本格的な開始時期は古墳時代後期段階からであることを指摘しながら、具体的資料を欠く盆地西半の扇頂部でも同様の状況であることを推測されている。新東名高速道路建設事業に伴う発掘調査が実施された地域は盆地内でも後者に該当することから、その関連調査において古墳時代の遺構が確認されなかったことは、その推測を補強していると考えられる。

2. 葛葉川沿いの後期古墳について

秦野市域の古墳時代集落は、市城南東部の大根地域では五領期・和泉期の遺跡が見られるのに対し、盆地内ではその出現を古墳時代後期段階とみることが出来る。これは古墳でも同様であり、大根地域には比々多遺跡群上坂東6号墳のように4世紀代まで遡る古墳前期の古墳も存在するが、主要な造営年代は6世紀～8世紀代であると考えられ、菩提橋手遺跡の古墳もこれに含まれる。

秦野市域における古墳の墳丘形態の主体は円墳であり、秦野市下大根に位置する二子塚古墳だけが前方後円墳である。盆地内の水無川中流域右岸に位置する榎土手古墳群のような大規模な古墳群も存在するが、こ

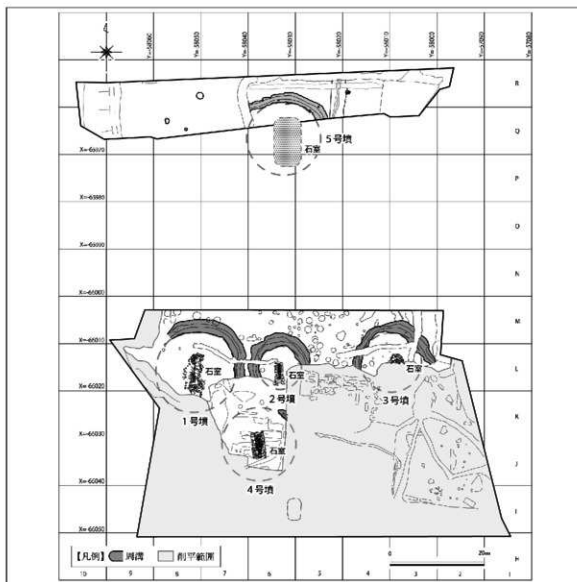


第3図 菅提・羽根地区の古墳(群)

これらの古墳の多くは1~20基ほどで構成される小規模な古墳群である。こうした秦野市域の古墳(群)は、水無川・葛葉川・金目川・大根川流域の丘陵縁辺部や丘陵斜面と沖積平地に築かれ、横穴墓群は市域の東南部に偏っていることが指摘されている(秦野市1990)。

菅提横手遺跡が所在する菅提地区は秦野盆地北縁の丹沢山地の麓に位置し、同地区を源流とする葛葉川流域に立地する。葛葉川は秦野盆地のほぼ中央を蛇行して南東方向へと流れ、金目川に合流する。葛葉川上流域に位置する古墳群としては、羽根古墳群と菅提馬場古墳群があり、後者は菅提横手遺跡と同じく葛葉川右岸の台地上に立地する(第3図)。「秦野の遺跡1997」では菅提馬場古墳群は6基の古墳からなり、現在は畑地の中に複数の墳丘が確認される。「秦野市史 通史1」(秦野市1990)によれば、その北西約200mに位置する菅提北石原64には古墳1基が存在するとされるが、「秦野の遺跡1997」では塚所不明となっている。これらの古墳群と川を挟んだ反対側、葛葉川左岸には羽根古墳群が確認されている。この古墳群は羽根字山崎に位置する羽根古墳(古墳1基)と羽根字矢塚に位置する羽根矢塚遺跡(古墳1基)が確認されており、さらに東側の西田原馬場原遺跡でも古墳が認められているとされる(秦野市1990・1997)。「秦野市史 別巻 考古編」(秦野市1985)の「羽根古墳群」の項において、森照吉氏の「北秦野村字羽根の石棚古墳発掘調査」より、羽根古墳の石室が横穴式で、玄室には礫を石畳上に敷き、その下に小砂利が敷かれていたこと、直刀、鉄鏝等の他、頭蓋骨片が出土したことが紹介されている。

菅提横手遺跡では5基の古墳が調査された(公益財団法人かながわ考古学財団2018・2022、三瓶2017、高



第4図 菩提横手遺跡 古墳配置図

橘2021) (第4図)。このうちH1～4号墳については石室を調査し、H5号墳は周溝の一部だけが調査された。いずれも墳丘形態は円墳で、周溝から推定される直径は9～17mを測る。H1～4号墳の石室は河原石積横穴式石室で、南側に開口していたと考えられるが、後世の段切りや宅地造成によって墳丘は削平され、H3号墳は石室の大部分が破壊された状態で検出された(写真1)。

H1号墳は直径16.4m、周溝の幅は2.5mを測り、5基の中では最も大きいと考えられる。石室形態は無袖式横穴式石室で、規模は残存長6.7m、幅1.1mを測り、一部の天井石が残存していた(写真2)。出土遺物は須恵器横瓶、須恵器提瓶、直刀、鉄鏃、切子玉、ガラス玉、管玉、小玉などが出土している。H2号墳は直径8.8m、周溝の幅は2.7mを測り、5基の中では最小の古墳である。石室は無袖式横穴式石室で、規模は残存3.0m、幅0.7m、玄室の残存する壁高は0.8mを測る(写真3)。出土遺物は土師器碗、直刀、刀子、鉄鏃が出土したほか、人骨の一部が残存していた。H3号墳は直径12.2m、周溝の幅2.7mを測る。石室は後世の段切りに破壊されているため非常に低く、奥壁付近のみが検出された(写真4)。石室の構造は不明だが、



写真1 菩提横手遺跡 H1～3号墳（南西から）

残存部の規模は長さ1.5m、幅0.85mを測る。出土遺物は須恵器片のほか、刀子、鉄鏃、管玉、ガラス小玉が出土した。H4号墳は後世の造成により残存状況が悪く、検出時には石室が露出し、中世以降の五輪塔なども混じる積石塚と認識されていた。周溝も墳丘北西部のごく一部のみが残存するだけで、大部分は削平されていた。古墳の規模は推定直径14.0mを測り、石室は両袖式横穴石室で、他の3基の古墳とは異なる（写真6）。石室の規模は残存長さ5.0m、玄室部長3.4m、奥室幅1.5mを測り、羨門幅は0.6mを測る。出土遺物は人骨のほか、刀子、鉄鏃、管玉、ガラス玉・小玉など玉類が見つかった。H5号墳はH1～4号墳の北側約30mに位置する。墳丘は石が積まれた高まりとなっており、「頼政大明神」の記銘のある石塔類や、鳥居の基礎部分などが確認され、近世～現代までは信仰対象の塚として使われたと考えられる。墳丘北側部分が令和2年度の発掘調査範囲に含まれ、周溝の約半分が調査されたことから古墳であることが判明したものである。周溝は半円状に検出され、幅2.5m、深さ0.35～0.55mを測り、その西側は後世の遺構に削平されている（写真5）。周溝からは土師器が数点出土した他、覆土上層から袋状鉄斧が出土したが、これは奈良・平安時代のものと考えられる。上記の通り、調査範囲南側に主体部と考えられる石積みが露出しているが、高速道路建設工事の影響を受けないと判断されたため掘削はせず、現状を記録した後に盛り土・被覆等を行うことで保護された。『秦野の遺跡1997』によれば菩提横手遺跡にはH5号墳の北側隣接地にも1基の古墳が存在すると考えられている（秦野市教育委員会 1997）。これを含めるとこの古墳群は6基以上の古墳で構成されていることになり、現状で確認されている構成数としては南側に近接する菩提馬場古墳群とほぼ同規模ということになる。

3. まとめ

葛葉川上流域に位置する秦野市菩提・羽根両地区の古墳・塚は住宅隣接地や畑地に位置しており、その多くは墳丘が削平された状態で確認されている。菩提横手遺跡で調査された5基の古墳も同様で、墳丘や石室が後世の段切りや宅地造成により壊されており、うち3基はこの調査で新たに発見されたものである。石室を調査したH1～4号墳については、いずれも石室から多様な遺物や人骨を確認することができ、同地域だけでなく秦野市域全体でみても本格的な調査を実施できた古墳として貴重な事例と言える。新東名高速道路建設事業に伴う発掘調査では、菩提横手遺跡の西方に近接する菩提谷戸尻遺跡、菩提政ヶ谷戸遺跡でも発掘調査が実施されたが、古墳時代の遺構は確認されなかった。先に述べたように、そのほかの新東名高速道路建設事業関連の発掘調査成果を見ても、金目川、唐沢川（葛葉川支流）、水無川、四十八瀬川上流域に立地する遺跡の調査では古墳時代の遺構を確認した事例はなかった。こうした状況は盆地内の古墳時代後期の集落は河川上流域の頂部にには少ない、という大上氏の指摘（大上1994）を補強することとなった。大上氏は秦野盆地周辺の集落や古墳をまとめられ、5～6世紀に大根地域に基盤を有した有力在地首長の主導性と朝鮮半島からの農具・技術導入によって6世紀後半以降に盆地地域への入植・開拓が進み、その主体は一般成員とその中から成長した有力成員であると考えられた。そして、大規模古墳群である桜土手古墳群が居住域から離れて立地している点について、伝統的な存在基盤を持たない新興の有力成員の墓域が、居住域・農耕地には不向きでも墳墓造営資材が得やすく、盆地地域の集落から臨みうる水無川中流域に設定されたためではないか、とされている（大上 前掲）。菩提横手遺跡の周辺に集落が実際に存在したか否かについては今後の周辺地域の調査によって変わる可能性もあるが、現状では菩提横手遺跡の古墳の造営集団についても盆地地域の同時期集落や周辺の古墳との関係を検討する必要がある。

一方で、桜土手古墳群とは異なると考えられる点も確認されている。調査者によれば、菩提横手遺跡の古墳の造営時期については今後の整理作業を待つ必要があるとしつつ、出土した須恵器の年代観からはH1～3号墳を桜土手古墳群より若干古いとする指摘があるとしている（公益財団法人かながわ考古学財団2019）。また、菩提横手遺跡でも唯一ではあるが、H4号墳の石室形態が両袖式である点も、無袖式横穴式石室主体である桜土手古墳群とは異なる。

秦野市域で確認された両袖式横穴式石室としては、金目川西岸に立地する金目原古墳1号墳（秦野市教委1995）に続く2例目である。さらに、相模においても伊勢原市登尾山古墳と合わせ3例目であり、この地域の円墳の石室形態としては特異であると言える。穴戸信悟氏は秦野市域の古墳石室をまとめられた際、近在の桜土手古墳群とは異なり、金目原古墳群が両袖式横穴式石室を導入した背景について、北関東の毛野地域からの波及や畿内系石室の影響といった要因を想定しつつ、可能性の1つとして2つの古墳群が金目川と水無川という別の水系に立地している点を挙げられている（穴戸2001）。

菩提横手遺跡の古墳については、出土遺物、石室構造などの検証を通して考察されるべきだが、両袖式横穴式石室の観点から金目原古墳群などの金目川上・中流域の古墳との関係については検討する必要がある。秦野市域で調査された古墳の事例としても貴重であることから、市域の古墳群、集落の考察についても今後の整理作業が待たれる。（吉澤）



写真2 菩提横手道跡 H1号墳（南から）



写真4 菩提横手道跡 H3号墳（南から）



写真3 菩提横手道跡 H2号墳（南から）



写真5 菩提横手道跡 H5号墳（南から）



写真6 菩提横手道跡 H4号墳（南から）

【引用・参考文献】

- 大上周三 1994「集落・墳墓分布における秦野市の古代社会」『神奈川考古』第30号
 公益財団法人かながわ考古学財団 2017『菩提横手遺跡』平成29年度現地見学会資料
 公益財団法人かながわ考古学財団 2018『年報』24 平成28年度
 公益財団法人かながわ考古学財団 2019『年報』25 平成29年度
 公益財団法人かながわ考古学財団 2022『年報』28 令和2年度
 穴戸信悟 2001「横穴式石室から見た古墳時代の秦野盆地」『秦野市立板土手古墳展示館研究紀要』第2号
 間根孝夫 2001「板土手古墳群の構成とその性格」『秦野市立板土手古墳展示館研究紀要』第2号
 高橋香 2021『菩提横手遺跡発掘調査概報』公益財団法人かながわ考古学財団
 秦野市 1985『秦野市史 別巻 考古編』
 秦野市 1990『秦野市史 通史1 総説・原・古代・中世』
 秦野市教育委員会 1995「秦野市金目原古墳群」『神奈川県埋蔵文化財調査報告』37
 秦野市教育委員会 1997「秦野の遺跡1997」『秦野市文化財調査報告書』1
 三瓶裕司 2017『菩提谷戸尻遺跡（第1・2地点）・菩提横手遺跡発掘調査概報』公益財団法人かながわ考古学財団
 三瓶裕司 2018『菩提政ヶ谷戸遺跡・菩提谷戸尻遺跡・菩提横手遺跡発掘調査概報』公益財団法人かながわ考古学財団
 吉田章一郎 2000「板土手古墳群考」『秦野市立板土手古墳展示館研究紀要』第1号

【図版出典等】

- 第1図 古墳時代プロジェクト作成
 第2図 大上周三 1994「集落・墳墓分布における秦野市の古代社会」『神奈川考古』第30号より作成
 位置図を作成・一部遺跡加筆
 第3図 吉澤作成
 第4図 2018・2021『菩提横手遺跡発掘調査概報』公益財団法人かながわ考古学財団
 古墳時代遺構配置図を合成
 写真1～5 2018『菩提横手遺跡発掘調査概報』公益財団法人かながわ考古学財団

県内集落出土の灰釉陶器の組成

—秦野市・伊勢原市の事例について—

奈良・平安時代研究プロジェクトチーム

はじめに

近年、高速道路等の建設工事が増え、事前調査等による神奈川県西部の山間地で調査事例が増加している。山間地域でも灰釉陶器もある一定の出土量が認められることから、集落出土の灰釉陶器の組成を整理する必要性を感じ、まず現段階までの出土事例の集成を試みることにした。26号で取り上げた秦野市、27、28号で2回に分けて伊勢原市の山間地というよりは端部及び、その裾に広がる扇状地上に展開する集落と、市城北側の遺跡の事例を取り上げた。伊勢原市域では大規模な発掘がまだ継続しており、報告書の刊行も徐々に増えてくることが推察される。今号ではこれまでの集成を元に灰釉陶器の組成を両市域の県西部山間地の灰釉陶器の広まりを、時期と器種構成、数量をまとめ灰釉陶器の在り方と傾向についてみていきたい。

(1) 秦野市

秦野市内の古代集落調査遺跡は、集成時の2021年段階では45遺跡を数え、そのうち17遺跡から灰釉陶器が出土している。その総数は、椀類、皿類、瓶・壺類合わせて277点であった。そして報告書において、すでに集成されていた草山遺跡(1990年)も含めると、388点と増量する。内訳は椀類が239点、皿類が83点、壺・瓶類が66点で、椀の割合が全体の6割と最も多かった。秦野市域は地形や歴史的な背景から、盆地地域と大根地域に分けることができる。ここでは地域ごとに各遺跡出土の灰釉陶器の在り方と傾向について、まとめていくこととする。

盆地地域の遺跡では、東田原中丸遺跡、寺山中丸遺跡、草山遺跡、太岳院遺跡、諏訪原遺跡、尾尻八幡神社前遺跡、今泉新井遺跡、西大竹小原遺跡、曾屋入船町遺跡、中里遺跡の10遺跡から灰釉陶器が出土している。東田原中丸遺跡、太岳院遺跡、今泉新井遺跡、曾屋入船町遺跡は、調査面積が少ないことも要因の一つとして考えられるが、1点のみの出土となっている。出土量が特に多く注目されるのは草山遺跡で、盆地地域全体の約8割を占めている。草山遺跡は、秦野盆地の東側、丹沢山地より南に派生した標高100m前後の台地上に位置している。数回の調査により、6世紀末から10世紀半ばにかけて盆地内最大級の集落が営まれていたことが明らかとなっている。灰釉陶器を出土した遺構は、竪穴住居が大半を占める。図化されたものだけでも椀が86点、皿類が33点、瓶・壺類が18点を数え、器種構成



第1図 古代郡位置図(河野案)

第1表 器種別一覧

	尾野福生 実式	10 V期前	830 VI期古	860 VI期中	890 VI期	920 VII期古	950 VII期中・新	1070 VIII期前		不明	合計		
		新戸10号 器式	井ヶ谷78号 器式	黒笹14号 器式	黒笹90号 器式	光が丘1号 器式	新戸53号 器式	大原2号 器式	黒山72号 器式			虎渓山1号 器式	首代寺 器式
1 小南遺跡	柄 皿類 柄・赤類			1	3		1		1		4	13	
2 東久保・鳥居松遺跡	柄 皿類 柄・赤類		1		1			1			2	2	
3 鉢ノ木遺跡	柄 皿類 柄・赤類			2	2		5					9	
4 根丸島遺跡	柄 皿類 柄・赤類				1							1	
5 大原117遺跡	柄 皿類 柄・赤類				3							3	
6 下大槻率遺跡	柄 皿類 柄・赤類			2	64		36		1		2	105	
7 鶴巻上原遺跡	柄 皿類 柄・赤類		2	9	4	10	6				2	31	
8 栗田原中丸遺跡	柄 皿類 柄・赤類										1	1	
9 寺山中丸遺跡	柄 皿類 柄・赤類			1	3							4	
10 黒山遺跡	柄 皿類 柄・赤類				1		7				6	14	
黒山遺跡1990年	柄 皿類 柄・赤類		1				1				5	6	
11 太谷院遺跡	柄 皿類 柄・赤類		4		4	8	59		1		6	72	
12 助成原遺跡	柄 皿類 柄・赤類			1				2			3	3	
13 尾尻八幡神社前遺跡	柄 皿類 柄・赤類				1	3					2	4	
14 今泉新井遺跡	柄 皿類 柄・赤類				1							1	
15 西大竹小原遺跡	柄 皿類 柄・赤類										3	3	
16 菅原入部町遺跡	柄 皿類 柄・赤類										2	2	
17 中里遺跡	柄 皿類 柄・赤類				1		2					3	
合計			8	11	23	133	80	71	3	3	1	55	388

は碗が主体となっている。器式別の出土量では、光が丘1器式が最も多く、全体の7割強を占めている。次いで猿投原の黒笹90号器式のもので1割の出土量がある。前段階の黒笹14号器式のものは6%ほどであった。盆地地域の他の遺跡では、尾尻八幡神社前遺跡で黒笹90号器式のものが6点、黒笹14号器式のものが1点、寺山中丸遺跡では黒笹90号器式のものが3点、黒笹14号器式のものが1点出土している。

大根地域は金目川と大根川に挟まれた北金目台地と、大根川と善波川に挟まれた鶴巻台地の両台地にあたる。本地域では、小南遺跡、東久保・鳥居松遺跡、鉢ノ木遺跡、根丸島遺跡、大原117遺跡、下大槻率遺跡、

鶴巻上原遺跡の7遺跡から灰軸陶器が出土している。出土量が特に多く注目されるのは下大槻峯遺跡で、大根地域全体の8割弱を占めている。下大槻峯遺跡は、標高60m前後の北金目台地の一角に位置し、5世紀後半から10世紀後半以降まで集落が営まれていた。出土した灰軸陶器は竪穴住居出土のものが最も多く、その他、掘立柱建物跡や土坑から出土している。器種構成は碗が105点、皿類が28点、瓶・壺類が33点を数え、碗が主体である。窯式別の出土量では黒笹90号窯式が87点で、全体の約5割を占め、続く折戸53号窯式のもの3割となっている。大根地域の他の遺跡でも黒笹90号窯式のもの为主体となっており、小南遺跡で11点、東北久保・鳥居松遺跡で5点、鉢ノ木遺跡で3点、根丸島遺跡で1点、大原117遺跡で3点と、遺跡ごとに高い割合を占めている。続く折戸53号窯式のものも、小南遺跡で5点、鉢ノ木遺跡で5点出土しており、割合の傾向は下大槻峯遺跡と変わらない。

以上、盆地地域と、大根地域に分けて、傾向をまとめた。器種構成として碗が主体であることは、両地域で変わらなかった。初出は尾野編年V期新段階（9世紀前半頃）の瓶・壺類がわずかに出土しており、ピークは尾野編年のVI期新～VII期古段階（9世紀後半～10世紀半ば頃）で、集落の隆盛期と比例している。

律令制下の行政区分では秦野市は余綾郡の領域となる。盆地地域は余綾郡北部の幡多郷にあたり、大根地域は水無川、金目川、葛葉川の合流付近から下流は金目郷にあたりとみられている。草山遺跡は幡多郷に属し、下大槻峯遺跡は金目郷に属しており、集落の規模や灰軸陶器の出土量の多さからも、両遺跡は各郷の拠点集落と言える。（諏訪間）

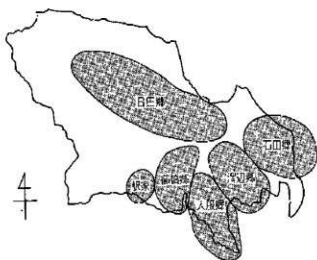
（2）伊勢原市南部地域

伊勢原市南地域としてとりあつた遺跡は、坪ノ内・宮ノ前遺跡を中心とした鶴巻台地東北部のエリアで、沼日天王原遺跡を中心とした伊勢原台地南東部、古代では柳橋郷、沼辺郷、大服郷付近にあたる。

南部エリアで出土している灰軸陶器は総数289点で、内訳は碗が174点、皿が37点、壺・瓶類が78点、蓋が1点であった。報告書本文では「高台付坏」として記載されていたが形状からみて碗に該当するため碗としてカウントしている。また、瓶類の中にもフラスコ瓶の口縁部に相当するものも含まれているため、その2

点は削除した。すべての資料を実見していないため報告書図版での見解となり、観察表等に産地が記載されているものについてはその判断に従った。

出土傾向としては、竪穴住居から出土することが多く、器種は碗（碗・深碗）がほとんどを占めている。尾野編年のVI期新～VII期古段階（9世紀後半～10世紀半ば頃）にピークがあり、徐々に縮小していく傾向がある。今回の中では比較的早い段階となる尾野編年V期新段階（9世紀前半頃）に、神戸・上宿遺跡から猿投産の瓶類が出土している。同遺跡の竪穴住居から出土している灰軸碗をみると黒笹90～折戸53号窯式段



第2図 6郷位置略図

第2表 器種別一覧

	尾野編年 V期新	830 VI期古	860 VI期新	890 VII期古	920 VII期新	950 VIII期古・新	1070 IX期新						
	新式10号 式	井ヶ谷7号 式	黒部14号 式	黒部90号 式	光が丘1号 式	新式53号 式	大原2号 式	東山72号 式	赤瀬山1号 式	西代寺 式	不明	合計	
1 井ノ内・宮ノ前遺跡	甕 皿類 瓶・香瓶											13 2 4	13 2 4
2 神戸・上宿遺跡	甕 皿類 瓶・香瓶			8		7				1			16 0 12
3 板戸・八雲院遺跡	甕 皿類 瓶・香瓶			2									2 0 0
4 東大竹・市場V遺跡	甕 皿類 瓶・香瓶												0 0 0
5 東大竹遺跡	甕 皿類 瓶・香瓶											30 5 8	30 5 8
6 稲荷久保遺跡 第Ⅲ地点3、4次調査	甕 皿類 瓶・香瓶												0 0 2
7 稲荷久保遺跡 第Ⅲ地点	甕 皿類 瓶・香瓶												0 0 0
8 船上山遺跡	甕 皿類 瓶・香瓶					1			1			1 4 1	1 4 1
9 東大竹下原遺跡	甕 皿類 瓶・香瓶											2 0 0	2 0 0
10 原之保遺跡	甕 皿類 瓶・香瓶												0 0 2
11 田中・第六天遺跡 第3・4地点	甕 皿類 瓶・香瓶			1								2 0 2	1 0 3
12 田中・第六天遺跡 第2地点	甕 皿類 瓶・香瓶				1				1				1 0 1
13 東大竹遺跡群	甕 皿類 瓶・香瓶				1								0 0 0
14 田中・万代遺跡	甕 皿類 瓶・香瓶				1							3 0 0	3 0 0
15 池端・藤山遺跡	甕 皿類 瓶・香瓶												0 0 0
16 池端・板戸遺跡	甕 皿類 瓶・香瓶				1								1 0 0
17 池端地区遺跡群	甕 皿類 瓶・香瓶					6 1		8 2 4				18 1 0	32 4 13
18 田中・次上遺跡	甕 皿類 瓶・香瓶							1					1 0 0
19 田中・天王寺遺跡	甕 H・蓋 皿類 瓶・香瓶					8 2 3				2		33 3 0	43 3 12
20 田中・萬代集遺跡	甕 皿類 瓶・香瓶			5 2	13 7		1 0					3 11 20	22 11 20
		2	2	10	36	20	14	16		4	1	184	

階としているものが多く、尾野編年VI期新～VII期古段階（9世紀後半～10世紀前半頃）にピークがある。神戸・上宿遺跡を中心としたエリアの集落の様相は、7世紀末～8世紀初頭からはじまり、10世紀前半ぐらいまで続く集落であり、8世紀前半段階から継続して集落が維持される地区である。灰釉陶器の導入がピークとなる9世紀後半～10世紀前半代にも住居が多くみられる時期でもあり、櫛栴那の中心地として存続してい

たのだろう。新しい段階でいえば、尾野編年のⅧ期新段階（11世紀前半頃）にあたる椀が神戸・上宿から出土している。集落構成としては住居址が激減する時期ではあるが、少数ではあるが流通している様相がみられる。

一方、渭辺郷に想定される沼目地区は、沼目天王原遺跡を中心として堅穴住居や掘立柱建物が集まる地区である。集落は7世紀後半からはじまり、12世紀代まで続く集落で、集落の主体時期は9世紀から10世紀前半頃とされている。灰軸陶器は、沼目諏訪面遺跡や沼目天王原遺跡の住居址から黒笹14号窯式段階の椀や皿からみられる。底面はヘラケズリ調整をする角高台で、特徴的である。灰軸陶器全体のピークは尾野編年Ⅵ期新～Ⅶ機古段階（9世紀後半～10世紀前半頃）で、椀、皿、瓶・壺類が多く、集落の主体時期とほぼ同様な傾向にある。集落は12世紀代まで続くが、古代末に特徴的な10杯2類やロクロ土師器はみられるものの、神戸・上宿遺跡のような百代寺窯式の段階の灰軸は共伴しない。

相模国内では、いわゆる「拠点集落」といわれる遺跡から灰軸陶器が比較的多くみられる傾向がある。このことは、高級食器としての「灰軸陶器」ではなく相模国内においては日常的な器としての使用がされていた結果を示唆するのではないだろうか。ただ、一般集落となるとまた出土する頻度が異なるため、あくまでも各部の拠点となる集落から出土する傾向が高いことがいえる。

相模国府城の灰軸陶器の搬入は、尾野編年Ⅴ期新段階からⅥ期古段階への移行期（9世紀2～4半期）に明確化し、Ⅵ期中段階から新段階への移行期（9世紀第3～4半期半ばから900年頃にかけて）に最高潮に達するとし、尾張産（猿投窯産・尾北窯産）がほぼ占めている（平尾・尾野2009）。相模国府城内に大量搬入された灰軸陶器は、相模国内の河川交通を利用して官衙や拠点集落、拠点集落間のネットワークを通じて流通すると考えられており（田尾2015）、相模川を北上し、渋田川や鈴川などを利用して柳橋郷や渭辺郷の拠点集落地へ運搬していったことが想定される。灰軸陶器のピーク時となる黒笹90号窯式～折戸53号窯式段階の産地についてはふれることができていない。この時期の産地が尾張産になるのか、三河・遠江産になるのかは別途検討が必要である。今後の課題としたい。（高橋）

（3）伊勢原市北部地域

伊勢原市北地域として取り扱った遺跡は渋田川周辺の、古代では石田郷と日田郷に位置する遺跡である。

北地域における灰軸陶器の総数は318点で、器種構成については、椀、皿、壺・瓶類が見られる。内訳は椀が218点、皿が47点、壺・瓶類が53点と椀が多く確認されている。窯式については、虎渓山1号窯式と折戸10号窯式と井ヶ谷78号窯式は確認されず、黒笹14号窯式では少量確認でき、そのあと黒笹90号窯式では増加を見せ、折戸53号窯式、さらに大原2号窯式で減少する。そして、折戸53号窯式では器種も碗のみが認められる状況となり、東山72号窯式と百代寺窯式では全く見られなくなってしまう。グラフの様子を見ると、（2）の南地域とほぼ同じであるが、北地域では見られなかった虎渓山1号窯式と折戸10号窯式と井ヶ谷78号窯式について、南地域では確認される点が少し異なる。出土傾向については、堅穴住居や切土整地層、水場遺構、道状遺構、段切などから出土が確認されており、（1）の秦野市と（2）の南地域と同様に堅穴住居からの出土が大半であった。総点数について、遺跡同士で比較してみると、一番多くの灰軸陶器が確認された遺跡は成瀬第二地区遺跡群高森地区において80点であった。その次は51点が確認された上粕屋・川上遺跡で、29点出土の西富岡・向畑遺跡第2地点がつづく。そして、上粕屋・和田内遺跡第7次調査や西富岡・向畑遺跡1、東富岡・北三間遺跡、弥杉・上ノ台遺跡、石田・峯遺跡第4地点の5遺跡が15～19点の出土が

第3表 器種別一覧

	足寄編年 式	年代										不明	合計
		800 830 860 890 920 950 1070											
		V期前 新戸10号 式	V期古 井ヶ谷78号 式	V期中 黒田14号 式	V期新 黒田90号 式	光が丘1号 式	V期古 新戸53号 式	大田2号 式	山田中・新 東山72号 式	V期新 虎渓山1号 式	V期前 吉代寺 式		
21 神成社遺跡第5地点	柄 紋類 柄・色類												0 0 0
22 神成社遺跡第8地点	柄 紋類 柄・色類												0 0 0
23 上船塚・石倉中遺跡第3	柄 紋類 柄・色類						1						1 0 0
24 上船塚・一ノ原上遺跡	柄 紋類 柄・色類											2	2 0 0
25 上船塚・一ノ原上遺跡 第2次調査	柄 紋類 柄・色類											3 1 1	3 0 1
26 上船塚・高瀬跡	柄 紋類 柄・色類											2 1 0	2 0 0
27 上船塚・一ノ原南遺跡	柄 紋類 柄・色類												0 1 0
28 上船塚・敷山土遺跡	柄 紋類 柄・色類				1		1						2 0 0
29 上船塚・和山内遺跡 第2次調査	柄 紋類 柄・色類			1									1 0 0
30 上船塚・和山内遺跡 第7次調査	柄 紋類 柄・色類				1	1	1						3 2 4
31 長竹遺跡	柄 紋類 柄・色類											4	4 0 0
32 西富岡・長竹遺跡 第2次調査	柄 紋類 柄・色類				1								1 1 0
33 西富岡・長竹遺跡 第4次調査	柄 紋類 柄・色類												5 1 0
34 西富岡・長竹遺跡 第5次調査	柄 紋類 柄・色類						1						1 0 0
35 西富岡・中島遺跡	柄 紋類 柄・色類				1							1	2 0 1
36 西富岡・山田遺跡1	柄 紋類 柄・色類											3 12 1	3 12 1
37 西富岡・山田遺跡 第2地点	柄 紋類 柄・色類				1							16 7 5	17 7 5
38 上船塚・F1西遺跡	柄 紋類 柄・色類											1	0 0 1
39 上船塚・上尾崎遺跡	柄 紋類 柄・色類												0 0 1
40 上船塚・三本松遺跡	柄 紋類 柄・色類				3							1	3 0 0
41 上船塚・川上遺跡	柄 紋類 柄・色類						3					31 4 1	40 4 1
42 東富岡・西之庄遺跡	柄 紋類 柄・色類											1 1 0	1 0 0
43 東富岡・北三間遺跡	柄 紋類 柄・色類				4 2							7 2 2	11 2 2

ている。西富岡・向畑遺跡第2地点では堅穴住居跡から2点、掘立柱建物跡から6点、土坑から2点、ピットから2点、切土盤地層から17点が出土している。器種を見ると、やはり甕が多いが、ほかに皿や段皿、把手付瓶、長頸瓶といった種類のものが確認できた。以上、比較的多くの灰軸陶器の出土が確認された2遺跡について概観したところ、灰軸陶器が確認される時期よりも少し前の段階となるが、西富岡・向畑遺跡1では金銅製飾金具や帯金具といった特徴的な遺物の事例などから拠点集落と考えられる遺跡で、そうした遺跡から灰軸陶器が多く確認されることが読み取れた。一方で、拠点集落といえるような特徴的な事例は確認されていない上粕屋・川上遺跡でも、遺構外からの出土ではあるが、50点近くの灰軸陶器が出土する場合もあることが分かった。(齋藤)

(4) まとめ

これまでに集成した灰軸陶器は、秦野市から出土した388点と伊勢原市を南北に分けて修正した灰軸陶器508点の計896点である。両市に共通している点は、尾野編年にあてはめると、Ⅶ期新からⅦ期古(9世紀後半～10世紀半ばごろ)にあたる900年前後に出土個体数の集中が見られる点と、出土傾向としては堅穴住居から最も多く、器種構成としては甕の出土が最も多いことがうかがえることであろう。黒埴90号窯式に比定される製品が最も多く出土しており、光が丘1号窯式、折戸53号窯式と続く。10世紀後半以降の急激な出土数の減少についても共通の傾向が見られた。甕に次いで皿類が多く出土しており、日常使いの器が比較的多い傾向がある。また出土には集中する集落、いわゆる各郷の拠点となる集落があり、ほとんど出土が見られない集落との違いを灰軸陶器の分布の偏在性もあらわにしている。灰軸陶器だけではなく視点からも検証する必要もあるであろう。

集成している期間に伊勢原地区、秦野地区に所在し、財団で時間をかけて調査していた発掘調査が終了し、順次整理作業に移行している。秦野市域では縄文の遺跡として注目を集める稲荷木遺跡や菩提地区、伊勢原市域では上粕屋地区などで、古代の集落も調査されている。これらの遺跡の情報が集積され、公表されたとき、神奈川県内でも山間部に近いこれらの地域における集落の様相や、今回の成果が補強され、修正されていくであろう。(加藤)

【参考文献】

- 田尾誠敏2015『関東への灰軸陶器の流入状況と在地土器』『灰軸陶器生産における地方窯の成立と展開』東海土器研究会
 かながわ考古学財団1998『かながわ考古学財団調査報告34 東富岡・杉戸遺跡 東富岡・北三間遺跡 上粕屋・川上遺跡 上粕屋・三本松遺跡 上粕屋・川上西遺跡』
 かながわ考古学財団2014①『西富岡・向畑遺跡 I 第1分冊』
 かながわ考古学財団2014②『西富岡・向畑遺跡 I 第2分冊』
 河野一也1993『奈良時代寺院成立の一端について(Ⅳ)』『神奈川考古』第29号
 神奈川県立埋蔵文化財センター1990『草山遺跡Ⅲ』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告18
 平尾正政幸・尾野善裕2009『湘南新道間連遺跡出土灰軸陶器の様相と相模国府』『湘南新道間連遺跡群Ⅱ』かながわ考古学財団調査報告242 財団法人かながわ考古学財団

【図版出展】

- 第1図 かながわ考古学財団1988『下大槻遺跡(Na.30)Ⅱ』かながわ考古学財団調査報告35
 第2図 伊勢原市教育委員会1995『伊勢原市史 通史編 先史・古代・中世』

神奈川県の県央地域の中世遺跡（9）

－かわらけの検討V－

中世研究プロジェクトチーム

はじめに

これまで、本プロジェクトチームでは、中世の中心である鎌倉市、小田原市以外の県内中世遺跡の発掘調査報告の集成を行ってきた。現在も県央部では発掘調査が盛んに行われており、特に伊勢原市では多くの中世遺跡が発見され注目されている。県央部から県西部の地域では、中世資料の蓄積もここ数年で著しく増加している状況が見受けられる。

在地の中世を検討する上で重要な遺物は、かわらけであろう。鎌倉と小田原では、かわらけの出土量も多く、これまで数多くの編年案や破片数量計測等が行われ、それぞれの歴史を検討する上で重要な役割を果たしている。一方、この2地域を除く県内では、服部の研究（服部1992など）が大きく寄与しているものの、全体的な出土量も少なく、研究は低調であった。本プロジェクトチームでも研究紀要2～7でかわらけの集成を行い、当時の成果をまとめている。この集成から約20年の時が経ち、新たな資料の増加がみられるため、追加の集成を行い、検討の基礎資料とする。

例言

1. 神奈川県内の県央・県西部地域については、明確な地域区分があるわけではない。今回は、伊勢原市の下糟屋・丸山遺跡第5地点、下糟屋・上町並遺跡を掲載する。
2. これまでの基礎データの集成に基づき抽出を行っている。文献番号は、研究紀要21の文献に対応する。
3. 図版の掲載は、これまで残存率1/2以上の遺物を基本としている。しかし、今回は残存率不詳であるが、同一遺構から多くのかかわらけが出土し図化されているため、復元寸法や器形が分かると判断できた遺物について掲載した。縮尺は1/3とした。
4. 備考の「ウズマキかわらけ」は、見込みにヘラ状工具等で渦巻文様を描くかわらけを示す。
5. 計測表の項目は、以下のとおりである。
 - （1）成形：報告書に明記されていない場合は、図版や写真から推測している。
 - （2）寸法：口径×底径×器高を記載。復元等は（ ）で記した。報告書に記載がない場合は、図版の測量値を〔 〕で記した。手づくねの底径については、報告書に記載されている場合は、それを記した。
 - （3）残存状況：報告書の記載を基本とするが、今回は不詳である。
 - （4）年代：報告書に記載がある場合は記した。
 - （5）備考：型式の特徴や付着物等が記載されている場合は記した。

【参考文献】

- 服部実喜 1992「南武蔵・相模における中世の食器様相（1）－中世初頭の様相－」『神奈川考古』第28号
神奈川考古同人会
- 服部実喜 1994「南武蔵・相模における中世の食器様相（2）－中世前期の様相－」『神奈川考古』第30号
神奈川考古同人会
- 服部実喜 1995「南武蔵・相模における中世の食器様相（3）－中世後期の様相Ⅰ－」『神奈川考古』第31号
神奈川考古同人会
- 服部実喜 1995「南武蔵・相模における中世の食器様相（4）－中世後期の様相Ⅱ－」『神奈川考古』第32号
神奈川考古同人会

※その他のかわらけの参考文献は研究紀要7「神奈川県内の「かわらけ」集成（6）」に記載

第1表 かわけ集成（伊勢原市）

下糟屋・丸山道跡 第5地点（文献番号 伊勢原市91）

番号	報告書 図番号	出土位置	かわけ				
			成彩	寸法 (cm)	残存状況	年代	備考
690	第57図-1	第1地点 土型状遺構	□クロ	[10.4×6.3×3.4]	実測図 から計測	15世紀中葉～後半頃	底部回転糸切り痕
691	第57図-2	第1地点 土型状遺構	□クロ	[9.6×5.8×2.9]	実測図 から計測	15世紀中葉～後半頃	底部回転糸切り痕
692	第57図-3	第1地点 土型状遺構	□クロ	[6.1×5.4×2.0]	実測図 から計測	15世紀中葉～後半頃	底部回転糸切り痕
693	第57図-4	第1地点 土型状遺構	□クロ	[6.2×4.8×1.9]	実測図 から計測	15世紀中葉～後半頃	底部回転糸切り痕
694	第57図-5	第1地点 2号溝状遺構	□クロ	[14.4×8.6×4.0]	実測図 から計測	15世紀中葉～後半頃	底部回転糸切り痕
695	第57図-6	第1地点 2号溝状遺構	□クロ	[12.1×6.9×3.6]	実測図 から計測	15世紀中葉～後半頃	底部回転糸切り痕
696	第57図-7	第1地点 4号溝状遺構	□クロ	[6.6×5.9×2.0]	実測図 から計測	15世紀中葉～後半頃	底部回転糸切り痕
697	第57図-8	第1地点 2号溝状遺構	□クロ	[5.6×3.9×1.4]	実測図 から計測	15世紀中葉～後半頃	底部回転糸切り痕
698	第57図-9	第1地点 2号溝状遺構	□クロ	[(11.6)×(8.1)×3.4]	実測図 から計測	15世紀中葉～後半頃	底部回転糸切り痕
699	第57図-10	第1地点 2号溝状遺構	□クロ	[(11.1)×(6.9)×3.2]	実測図 から計測	15世紀中葉～後半頃	底部回転糸切り痕
700	第57図-11	第1地点 2号溝状遺構	□クロ	[(12.9)×(9.4)×3.1]	実測図 から計測	15世紀中葉～後半頃	底部回転糸切り痕
701	第57図-12	第1地点 2号溝状遺構	□クロ	[(10.7)×(7.1)×3.2]	実測図 から計測	15世紀中葉～後半頃	底部回転糸切り痕
702	第57図-13	第1地点 2号溝状遺構	□クロ	[(10.5)×(5.9)×3.0]	実測図 から計測	15世紀中葉～後半頃	底部回転糸切り痕
703	第57図-14	第1地点 2号溝状遺構	□クロ	[(11.4)×(6.6)×2.9]	実測図 から計測	15世紀中葉～後半頃	底部回転糸切り痕
704	第57図-15	第1地点 土型状遺構	□クロ	[(9.6)×(6.6)×2.2]	実測図 から計測	15世紀中葉～後半頃	底部回転糸切り痕
705	第57図-16	第1地点 2号溝状遺構	□クロ	[9.2×6.1×2.7]	実測図 から計測	15世紀中葉～後半頃	底部回転糸切り痕
706	第57図-17	第1地点 2号溝状遺構	□クロ	[(9.1)×(6.2)×2.9]	実測図 から計測	15世紀中葉～後半頃	底部回転糸切り痕
707	第57図-18	第1地点 2号溝状遺構	□クロ	[(8.7)×5.9×3.2]	実測図 から計測	15世紀中葉～後半頃	底部回転糸切り痕
708	第57図-19	第1地点 2号溝状遺構	□クロ	[(8.4)×(6.1)×2.5]	実測図 から計測	15世紀中葉～後半頃	底部回転糸切り痕
709	第57図-20	第1地点 2号溝状遺構	□クロ	[(8.9)×(5.1)×2.9]	実測図 から計測	15世紀中葉～後半頃	底部回転糸切り痕
710	第57図-21	第1地点 2号溝状遺構	□クロ	[(8.5)×(6.0)×2.8]	実測図 から計測	15世紀中葉～後半頃	底部回転糸切り痕
711	第58図-1	第1地点 2号溝状遺構	□クロ	[(7.4)×(5.8)×2.3]	実測図 から計測	15世紀中葉～後半頃	底部回転糸切り痕
712	第58図-2	第1地点 2号溝状遺構	□クロ	[(8.0)×(6.9)×2.0]	実測図 から計測	15世紀中葉～後半頃	底部回転糸切り痕
713	第58図-3	第1地点 2号溝状遺構	□クロ	[(7.4)×(5.4)×1.9]	実測図 から計測	15世紀中葉～後半頃	底部回転糸切り痕
714	第58図-4	第1地点 2号溝状遺構	□クロ	[(7.1)×(5.1)×1.8]	実測図 から計測	15世紀中葉～後半頃	底部回転糸切り痕
715	第58図-5	第1地点 2号溝状遺構	□クロ	[(6.6)×(5.0)×2.0]	実測図 から計測	15世紀中葉～後半頃	底部回転糸切り痕
716	第58図-6	第1地点 2号溝状遺構	□クロ	[(7.0)×(5.4)×1.7]	実測図 から計測	15世紀中葉～後半頃	底部回転糸切り痕

神奈川県 県央地域の中世道跡 (9)

番号	報告書 図番号	出土位置	かわらけ				
			成形	寸法 (cm)	残存状況	年代	備考
717	第58図-7	第1地点 土壇状遺構	□クロ	[6.1×5.1×1.4]	実測図 から計測	15世紀中葉～後半頃	底部回転糸切り痕
718	第58図-8	第1地点 土壇状遺構	□クロ	[(6.2)×(5.0)×1.5]	実測図 から計測	15世紀中葉～後半頃	底部回転糸切り痕
719	第58図-9	第1地点 土壇状遺構	□クロ	[(5.5)×(3.9)×1.9]	実測図 から計測	15世紀中葉～後半頃	底部回転糸切り痕
720	第58図-12	第1地点 2号溝状遺構	□クロ	[8.9×6.6×2.9]	実測図 から計測	15世紀中葉～後半頃	底部回転糸切り痕、増地に転用
721	第70図-1	第2地点 1号溝状遺構	□クロ	[(10.9)×(9.0)×3.2]	実測図 から計測	15世紀中葉～後半頃	底部回転糸切り痕
722	第70図-2	第2地点 1号溝状遺構	□クロ	[(10.1)×(8.0)×3.2]	実測図 から計測	15世紀中葉～後半頃	底部回転糸切り痕
723	第70図-3	第2地点 1号溝状遺構	□クロ	[(10.6)×(9.1)×2.9]	実測図 から計測	15世紀中葉～後半頃	底部回転糸切り痕
724	第70図-4	第2地点 1号溝状遺構	□クロ	[(10.4)×(8.4)×2.3]	実測図 から計測	15世紀中葉～後半頃	底部回転糸切り痕
725	第70図-5	第2地点 1号溝状遺構	□クロ	[(10.4)×(8.4)×2.1]	実測図 から計測	15世紀中葉～後半頃	底部回転糸切り痕
726	第70図-6	第2地点 1号溝状遺構	□クロ	[(9.7)×(7.4)×2.2]	実測図 から計測	15世紀中葉～後半頃	底部回転糸切り痕
727	第70図-7	第2地点 1号溝状遺構	□クロ	[(10.4)×(6.9)×2.6]	実測図 から計測	15世紀中葉～後半頃	底部回転糸切り痕
728	第70図-8	第2地点 1号溝状遺構	□クロ	[(9.8)×(7.0)×2.6]	実測図 から計測	15世紀中葉～後半頃	底部回転糸切り痕
729	第70図-9	第2地点 1号溝状遺構	□クロ	[9.2×7.0×2.4]	実測図 から計測	15世紀中葉～後半頃	底部回転糸切り痕
730	第70図-10	第2地点 1号溝状遺構	□クロ	[9.4×7.0×2.5]	実測図 から計測	15世紀中葉～後半頃	底部回転糸切り痕
731	第70図-11	第2地点 1号溝状遺構	□クロ	[9.8)×(8.0)×2.1]	実測図 から計測	15世紀中葉～後半頃	底部回転糸切り痕
732	第70図-12	第2地点 1号溝状遺構	□クロ	[(9.4)×(8.0)×2.4]	実測図 から計測	15世紀中葉～後半頃	底部回転糸切り痕
733	第70図-13	第2地点 1号溝状遺構	□クロ	[8.5×7.9×2.9]	実測図 から計測	15世紀中葉～後半頃	底部回転糸切り痕
734	第70図-14	第2地点 1号溝状遺構	□クロ	[(9.0)×(7.0)×2.3]	実測図 から計測	15世紀中葉～後半頃	底部回転糸切り痕
735	第70図-15	第2地点 1号溝状遺構	□クロ	[(9.2)×(6.8)×3.1]	実測図 から計測	15世紀中葉～後半頃	底部回転糸切り痕
736	第70図-16	第2地点 1号溝状遺構	□クロ	[(8.0)×(6.9)×2.0]	実測図 から計測	15世紀中葉～後半頃	底部回転糸切り痕
737	第70図-17	第2地点 1号溝状遺構	□クロ	[(6.4)×(5.1)×1.9]	実測図 から計測	15世紀中葉～後半頃	底部回転糸切り痕
738	第70図-18	第2地点 1号溝状遺構	□クロ	[(5.9)×(4.9)×2.0]	実測図 から計測	15世紀中葉～後半頃	底部回転糸切り痕
739	第70図-19	第2地点 1号溝状遺構	□クロ	[6.1×5.4×1.6]	実測図 から計測	15世紀中葉～後半頃	底部回転糸切り痕
740	第70図-20	第2地点 1号溝状遺構	□クロ	[(6.0)×(5.8)×1.9]	実測図 から計測	15世紀中葉～後半頃	底部回転糸切り痕
741	第70図-21	第2地点 1号溝状遺構	□クロ	[(5.2)×(4.8)×1.6]	実測図 から計測	15世紀中葉～後半頃	底部回転糸切り痕

下糟屋・上町並遺跡（文献番号 伊勢原市92）

番号	報告書 図番号	出土位置	かわらけ			
			成層	寸法 (cm)	残存状況	備考
742	第85図-1	第1地点A区 1号井戸	ロクロ	[13.4×7.0×3.7]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期 見込み満巻き状ナズ版(ウズマキ)。底部回転糸切り痕。
743	第85図-2	第1地点A区 1号井戸	ロクロ	[13.4×6.9×3.4]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期 見込み満巻き状ナズ版(ウズマキ)。底部回転糸切り痕。
744	第85図-3	第1地点A区 1号井戸	ロクロ	[13.2×6.9×3.6]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期 見込み満巻き状ナズ版(ウズマキ)。底部回転糸切り痕。
745	第85図-4	第1地点A区 1号井戸	ロクロ	[13.2×6.8×3.6]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期 見込み満巻き状ナズ版(ウズマキ)。底部回転糸切り痕。
746	第85図-5	第1地点A区 1号井戸	ロクロ	[13.4×7.2×3.5]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期 見込み満巻き状ナズ版(ウズマキ)。底部回転糸切り痕。
747	第85図-6	第1地点A区 1号井戸	ロクロ	[13.2×7.0×3.2]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期 見込み満巻き状ナズ版(ウズマキ)。底部回転糸切り痕。
748	第86図-1	第1地点A区 1号井戸	ロクロ	[14.6]×(7.6)×3.6]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期 見込み満巻き状ナズ版(ウズマキ)。底部回転糸切り痕。
749	第86図-2	第1地点A区 1号井戸	ロクロ	[(13.4)×(7.1)×3.3]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期 見込み満巻き状ナズ版(ウズマキ)。底部回転糸切り痕、 板状圧痕。
750	第86図-3	第1地点A区 1号井戸	ロクロ	[(13.6)×(7.1)×3.9]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期 見込み満巻き状ナズ版(ウズマキ)。底部回転糸切り痕。
751	第86図-4	第1地点A区 1号井戸	ロクロ	[-×(7.6)×(3.4)]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期 口縁部打ち欠き、見込み満 巻き状ナズ版(ウズマキ)。底部 回転糸切り痕。
752	第86図-5	第1地点A区 1号井戸	ロクロ	[-×(6.9)×(3.6)]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期 口縁部打ち欠き、見込み満 巻き状ナズ版(ウズマキ)。底部 回転糸切り痕。
753	第86図-6	第1地点A区 1号井戸	ロクロ	[-×(7.1)×(3.4)]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期 口縁部打ち欠き、見込み満 巻き状ナズ版(ウズマキ)。底部 回転糸切り痕。
754	第86図-7	第1地点A区 1号井戸	ロクロ	[-×(7.4)×(3.2)]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期 口縁部打ち欠き、見込み満 巻き状ナズ版(ウズマキ)。底部 回転糸切り痕。
755	第86図-8	第1地点A区 1号井戸	ロクロ	[(14.0)×(7.9)×3.4]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期 底部回転糸切り痕。
756	第86図-9	第1地点A区 1号井戸	ロクロ	[(13.2)×(6.6)×3.8]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期 底部回転糸切り痕。
757	第87図-1	第1地点A区 1号井戸	ロクロ	[(12.8)×(6.8)×3.9]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期 底部回転糸切り痕。
758	第87図-2	第1地点A区 1号井戸	ロクロ	[(13.9)×(7.0)×3.3]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期 底部回転糸切り痕。
759	第87図-3	第1地点A区 1号井戸	ロクロ	[(13.2)×(7.9)×3.4]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期 底部回転糸切り痕。
760	第87図-4	第1地点A区 1号井戸	ロクロ	[(13.4)×(7.4)×3.7]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期 底部回転糸切り痕。
761	第87図-5	第1地点A区 1号井戸	ロクロ	[(12.8)×(7.9)×3.9]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期 底部回転糸切り痕。
762	第87図-6	第1地点A区 1号井戸	ロクロ	[(8.5)×(5.1)×2.8]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期 底部回転糸切り痕。
763	第87図-7	第1地点A区 1号井戸	ロクロ	[(7.9)×(5.1)×3.2]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期 底部回転糸切り痕。
764	第87図-8	第1地点A区 1号井戸	ロクロ	[(7.3)×(4.7)×2.3]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期 底部回転糸切り痕。
765	第87図-9	第1地点A区 1号井戸	ロクロ	[(7.1)×(4.6)×2.7]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期 底部回転糸切り痕。
766	第87図-10	第1地点A区 1号井戸	ロクロ	[(7.2)×(4.8)×2.1]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期 底部回転糸切り痕。
767	第87図-11	第1地点A区 1号井戸	ロクロ	[(7.1)×(4.3)×2.4]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期 底部回転糸切り痕。
768	第88図-1	第1地点A区 1号井戸	ロクロ	[11.4×4.5×3.5]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期 底部回転糸切り痕。

神奈川県 県央地域の中世遺跡 (9)

番号	報告書 図番号	出土位置	かわらけ				
			成形	寸法 (cm)	残存状況	年代	備考
769	第88図-2	第1地点A区 1号井戸	口タロ	[12.1×7.9×3.4]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
770	第88図-3	第1地点A区 1号井戸	口タロ	[12.0×7.5×3.2]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
771	第88図-4	第1地点A区 1号井戸	口タロ	[11.0×8.1×2.0]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
772	第88図-5	第1地点A区 1号井戸	口タロ	[11.8×7.9×3.0]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
773	第88図-6	第1地点A区 1号井戸	口タロ	[11.6×8.0×3.2]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
774	第88図-7	第1地点A区 1号井戸	口タロ	[11.0×8.1×3.0]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
775	第88図-8	第1地点A区 1号井戸	口タロ	[11.4×8.0×3.2]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
776	第88図-9	第1地点A区 1号井戸	口タロ	[11.6×7.9×3.4]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
777	第88図-10	第1地点A区 1号井戸	口タロ	[11.4×7.3×3.1]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
778	第88図-11	第1地点A区 1号井戸	口タロ	[10.8×7.4×3.0]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
779	第88図-12	第1地点A区 1号井戸	口タロ	[(11.4)×(8.3)×3.1]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
780	第88図-13	第1地点A区 1号井戸	口タロ	[(12.4)×(8.8)×3.3]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
781	第88図-14	第1地点A区 1号井戸	口タロ	[(11.8)×(8.4)×3.2]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
782	第88図-15	第1地点A区 1号井戸	口タロ	[(13.2)×(8.3)×3.2]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
783	第89図-1	第1地点A区 1号井戸	口タロ	[(11.6)×(7.8)×3.1]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
784	第89図-2	第1地点A区 1号井戸	口タロ	[(11.0)×(8.8)×3.3]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
785	第89図-3	第1地点A区 1号井戸	口タロ	[(11.1)×(7.8)×2.9]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
786	第89図-4	第1地点A区 1号井戸	口タロ	[11.4×8.1×3.0]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
787	第89図-5	第1地点A区 1号井戸	口タロ	[(11.0)×(9.1)×2.9]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
788	第89図-6	第1地点A区 1号井戸	口タロ	[(10.8)×(7.4)×2.8]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
789	第89図-7	第1地点A区 1号井戸	口タロ	[10.8×6.9×2.8]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
790	第89図-8	第1地点A区 1号井戸	口タロ	[9.6×7.1×2.7]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
791	第89図-9	第1地点A区 1号井戸	口タロ	[10.0×7.4×2.6]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
792	第89図-10	第1地点A区 1号井戸	口タロ	[9.5×7.3×2.5]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
793	第89図-11	第1地点A区 1号井戸	口タロ	[9.3×6.9×2.5]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
794	第89図-12	第1地点A区 1号井戸	口タロ	[9.5×7.9×2.6]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
795	第89図-13	第1地点A区 1号井戸	口タロ	[9.8×6.8×2.6]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
796	第89図-14	第1地点A区 1号井戸	口タロ	[9.1×6.5×3.0]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
797	第89図-15	第1地点A区 1号井戸	口タロ	[9.2×6.8×2.4]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕

番号	報告書 図番号	出土位置	かわらけ				
			成形	寸法 (cm)	残存状況	年代	備考
798	第89図-16	第1地点A区 1号井戸	口口口	[8.3×6.2×2.8]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
799	第89図-17	第1地点A区 1号井戸	口口口	[9.6×6.4×2.6]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
800	第89図-18	第1地点A区 1号井戸	口口口	[(9.6) × (6.0) × 3.2]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
801	第90図-1	第1地点A区 1号井戸	口口口	[9.2×6.3×2.4]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
802	第90図-2	第1地点A区 1号井戸	口口口	[(9.4) × (7.1) × 2.3]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
803	第90図-3	第1地点A区 1号井戸	口口口	[(9.1) × (6.2) × 2.3]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
804	第90図-4	第1地点A区 1号井戸	口口口	[(8.8) × (6.0) × 2.2]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
805	第90図-5	第1地点A区 1号井戸	口口口	[(9.2) × (6.6) × 2.4]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
806	第90図-6	第1地点A区 1号井戸	口口口	[(8.6) × (6.8) × 2.5]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
807	第90図-7	第1地点A区 1号井戸	口口口	[(9.2) × (6.4) × 2.5]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
808	第90図-8	第1地点A区 1号井戸	口口口	[(8.6) × (6.1) × 2.4]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
809	第90図-9	第1地点A区 1号井戸	口口口	[(9.4) × (7.4) × 3.0]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
810	第90図-10	第1地点A区 1号井戸	口口口	[9.4×6.2×2.8]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
811	第90図-11	第1地点A区 1号井戸	口口口	[8.2×6.8×2.6]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
812	第90図-12	第1地点A区 1号井戸	口口口	[(8.0) × (5.2) × 2.1]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
813	第90図-13	第1地点A区 1号井戸	口口口	[7.4×5.9×2.0]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
814	第90図-14	第1地点A区 1号井戸	口口口	[(8.0) × (6.4) × 1.9]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
815	第90図-15	第1地点A区 1号井戸	口口口	[(6.9) × (5.8) × 2.2]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
816	第90図-16	第1地点A区 1号井戸	口口口	[7.0×6.2×2.1]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
817	第90図-17	第1地点A区 1号井戸	口口口	[7.0×5.6×2.3]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
818	第90図-18	第1地点A区 1号井戸	口口口	[7.1×5.4×2.3]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
819	第90図-19	第1地点A区 1号井戸	口口口	[7.2×5.6×1.9]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
820	第90図-20	第1地点A区 1号井戸	口口口	[6.9×5.4×2.1]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
821	第90図-21	第1地点A区 1号井戸	口口口	[6.7×4.7×2.1]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
822	第90図-22	第1地点A区 1号井戸	口口口	[6.6×5.3×2.3]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
823	第90図-23	第1地点A区 1号井戸	口口口	[6.6×4.9×2.3]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
824	第90図-24	第1地点A区 1号井戸	口口口	[6.4×5.4×2.0]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
825	第90図-25	第1地点A区 1号井戸	口口口	[7.2×5.6×2.0]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
826	第90図-26	第1地点A区 1号井戸	口口口	[6.3×4.9×1.8]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕

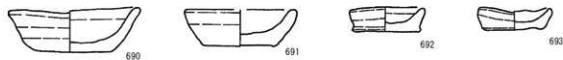
神奈川県 県央地域の中世道跡 (9)

番号	報告書 図番号	出土位置	かわらけ				
			成形	寸法 (cm)	残存状況	年代	備考
827	第90図-27	第1地点A区 1号井戸	口口口	[6.9×4.6×2.0]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部同転糸切り痕
828	第91図-1	第1地点A区 1号井戸	口口口	[9.5×6.6×2.6]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部同転糸切り痕
829	第91図-2	第1地点A区 1号井戸	口口口	[9.2×7.4×3.3]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部同転糸切り痕
830	第91図-3	第1地点A区 1号井戸	口口口	[9.6×7.8×2.6]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部同転糸切り痕
831	第91図-4	第1地点A区 1号井戸	口口口	[8.6×7.2×2.5]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部同転糸切り痕
832	第91図-5	第1地点A区 1号井戸	口口口	[9.0×6.9×2.9]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部同転糸切り痕
833	第91図-6	第1地点A区 1号井戸	口口口	[8.9×7.1×2.4]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部同転糸切り痕
834	第91図-7	第1地点A区 1号井戸	口口口	[(8.5)×(6.6)×2.8]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部同転糸切り痕
835	第91図-8	第1地点A区 1号井戸	口口口	[(8.6)×(6.8)×2.3]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部同転糸切り痕
836	第91図-9	第1地点A区 1号井戸	口口口	[(9.0)×(6.7)×2.9]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部同転糸切り痕
837	第91図-10	第1地点A区 1号井戸	口口口	[(9.6)×(6.8)×2.7]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部同転糸切り痕
838	第91図-11	第1地点A区 1号井戸	口口口	[(9.6)×(7.1)×2.3]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部同転糸切り痕
839	第91図-12	第1地点A区 1号井戸	口口口	[(8.8)×(6.4)×6.8]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部同転糸切り痕
840	第91図-13	第1地点A区 1号井戸	口口口	[(10.1)×(9.0)×2.6]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部同転糸切り痕
841	第91図-14	第1地点A区 1号井戸	口口口	[(10.3)×(7.1)×2.7]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部同転糸切り痕
842	第91図-15	第1地点A区 1号井戸	口口口	[10.1×6.9×2.9]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部同転糸切り痕
843	第91図-16	第1地点A区 1号井戸	口口口	[(10.4)×(6.4)×3.0]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部同転糸切り痕
844	第91図-17	第1地点A区 1号井戸	口口口	[9.6×7.1×2.3]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部同転糸切り痕
845	第91図-18	第1地点A区 1号井戸	口口口	[9.7×7.1×2.3]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部同転糸切り痕
846	第91図-19	第1地点A区 1号井戸	口口口	[(9.0)×(6.1)×2.8]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部同転糸切り痕
847	第91図-20	第1地点A区 1号井戸	口口口	[9.3×6.9×2.3]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部同転糸切り痕
848	第92図-1	第1地点A区 1号井戸	口口口	[7.3×5.8×2.4]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部同転糸切り痕
849	第92図-2	第1地点A区 1号井戸	口口口	[(6.8)×(5.6)×2.3]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部同転糸切り痕
850	第92図-3	第1地点A区 1号井戸	口口口	[6.9×5.3×2.1]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部同転糸切り痕
851	第92図-4	第1地点A区 1号井戸	口口口	[5.9×4.8×2.3]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部同転糸切り痕
852	第92図-5	第1地点A区 1号井戸	口口口	[6.8×5.3×2.0]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部同転糸切り痕
853	第92図-6	第1地点A区 1号井戸	口口口	[7.3×5.6×2.2]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部同転糸切り痕
854	第92図-7	第1地点A区 1号井戸	口口口	[(6.4)×(5.6)×2.0]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部同転糸切り痕
855	第92図-8	第1地点A区 1号井戸	口口口	[(6.9)×(5.8)×2.1]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部同転糸切り痕

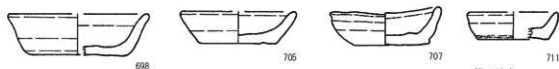
番号	報告書 図番号	出土位置	かわらけ				
			成形	寸法 (cm)	残存状況	年代	備考
856	第92図-9	第1地点A区 1号井戸	口タロ	[(6.8) × (5.8) × 1.9]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
857	第92図-10	第1地点A区 1号井戸	口タロ	[(6.8) × (5.3) × 1.9]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
858	第92図-11	第1地点A区 1号井戸	口タロ	[(6.5) × (5.3) × 2.0]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
859	第92図-12	第1地点A区 1号井戸	口タロ	[(6.3) × (5.0) × 2.0]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
860	第92図-13	第1地点A区 1号井戸	口タロ	[(6.2) × (5.0) × 2.2]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
861	第92図-14	第1地点A区 1号井戸	口タロ	[(6.3) × (5.3) × 2.2]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
862	第92図-15	第1地点A区 1号井戸	口タロ	[(6.3) × (4.6) × 2.0]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
863	第92図-16	第1地点A区 1号井戸	口タロ	[(6.8) × (5.3) × 2.3]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
864	第92図-17	第1地点A区 1号井戸	口タロ	[(6.7) × (5.0) × 2.1]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
865	第92図-18	第1地点A区 1号井戸	口タロ	[(6.6) × (5.0) × 2.0]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
866	第92図-19	第1地点A区 1号井戸	口タロ	[(6.4) × (4.9) × 1.7]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
867	第92図-20	第1地点A区 1号井戸	口タロ	[(6.2) × (5.4) × 1.6]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
868	第92図-21	第1地点A区 1号井戸	口タロ	[6.6 × 5.1 × 2.3]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
869	第92図-22	第1地点A区 1号井戸	口タロ	[(6.3) × (5.3) × 2.3]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
870	第92図-23	第1地点A区 1号井戸	口タロ	[(6.6) × (5.0) × 2.3]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
871	第92図-24	第1地点A区 1号井戸	口タロ	[(6.1) × (3.9) × 2.0]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
872	第92図-25	第1地点A区 1号井戸	口タロ	[4.4 × 3.4 × 1.6]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
873	第92図-26	第1地点A区 1号井戸	口タロ	[4.5 × 2.3 × 1.4]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
874	第92図-27	第1地点A区 1号井戸	口タロ	[15.4 × 10.8 × 4.4]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
875	第92図-28	第1地点A区 1号井戸	口タロ	[13.5 × 4.1 × 8.5]	実測図 から計測	15世紀末葉～ 16世紀第1四半期	底部回転糸切り痕
876	第104図-1	第2地点	口タロ	[(9.2) × (6.1) × 2.3]	実測図 から計測	15世紀後半	底部回転糸切り痕
877	第104図-2	第2地点	口タロ	[ー × 5.0 × (1.1)]	実測図 から計測	15世紀後半	見込み渦巻き状ナグ痕(ウズマキ)、底部回転糸切り痕

下糟屋・丸山遺跡

第1地点土壘状遺構



第1地点2号溝状遺構



第1地点
4号溝状遺構

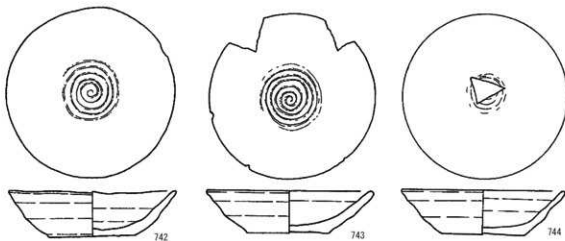


第2地点1号溝状遺構



下糟屋・上町並遺跡

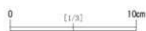
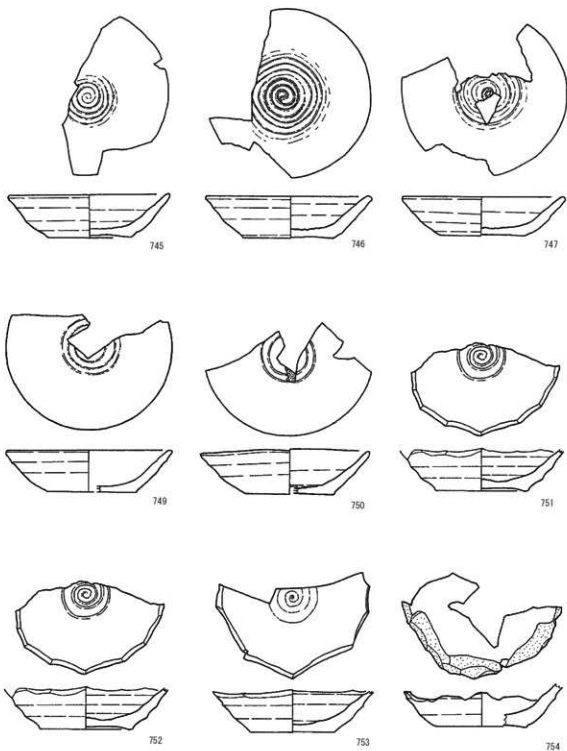
第1地点A区1号井戸(1)



第1図 かわらけ(1)

下糟屋・上町並遺跡

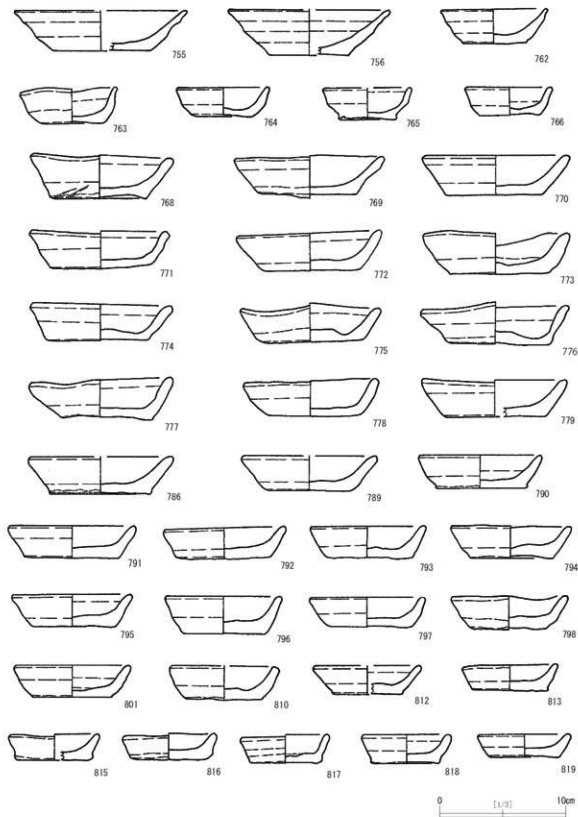
第1地点A区1号井戸(2)



第2図 かわらけ(2)

下糟屋・上町並遺跡

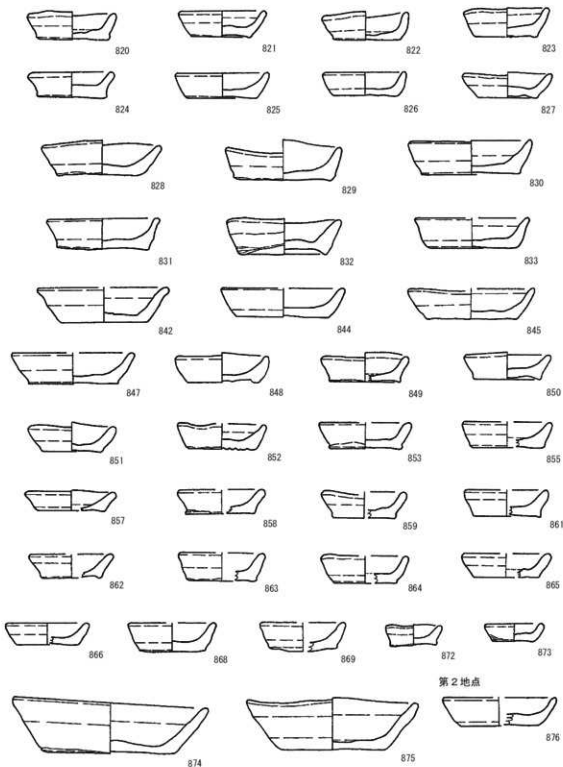
第1地点A区1号井戸(3)



第3図 かわらけ(3)

下糟屋・上町並遺跡

第1地点A区1号井戸(4)



第4図 かわけ(4)

近世道状遺構の集成（9）

近世プロジェクトチーム

はじめに

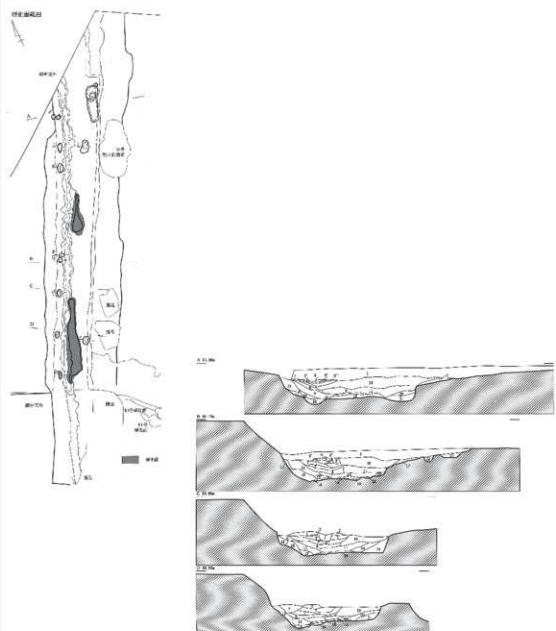
本プロジェクトチームでは、2015 年度より近世道状遺構の集成を行っている。

県内の遺跡で発見され、報告されている近世の道状遺構のデータを集成し、規模や構築方法等について検討していく予定である。今回は、伊勢原市上粕屋・石倉中遺跡 (No.40)、栗窪・林遺跡、栗窪・林台遺跡、栗窪・四石田遺跡 (No.71)、神成松遺跡第8地点Ⅰ (No.74)、西富岡・向畑遺跡 (No.160)、池端・坂戸遺跡 (No.170) を取り上げる。

凡 例

- ・遺構名は報告書の記載に基づく。
- ・縮尺は平面図がスペースに収まるような大きさに適宜変えているため、図ごとに示した。
- ・断面図は報告書に複数記載されている例もあるが、一部を記載することにした。

資料 No.	遺跡名	遺構名	文献名
151	上粕屋・石倉中遺跡	K 2 号道状遺構	2013年『上粕屋・石倉中遺跡 (No.40)』かながわ考古学財団調査報告294
152	上粕屋・石倉中遺跡	K 1 ～ 2 号礎化面	2013年『上粕屋・石倉中遺跡 (No.40)』かながわ考古学財団調査報告294
153	栗窪・林遺跡	6 区 K 1 ～ 3 号 礎化面	2023年『栗窪・林遺跡、栗窪・林台遺跡、栗窪・西石田遺跡 (No.71)』 かながわ考古学財団調査報告334
154	栗窪・林遺跡	6 区 K 4 ・ 5 号礎化 面	2023年『栗窪・林遺跡、栗窪・林台遺跡、栗窪・西石田遺跡 (No.71)』 かながわ考古学財団調査報告334
155	栗窪・林遺跡	6 区 K 6 ・ 7 号 礎化面	2023年『栗窪・林遺跡、栗窪・林台遺跡、栗窪・西石田遺跡 (No.71)』 かながわ考古学財団調査報告334
156	栗窪・林台遺跡	3 区 K 1 号礎化面	2023年『栗窪・林遺跡、栗窪・林台遺跡、栗窪・西石田遺跡 (No.71)』 かながわ考古学財団調査報告334
157	栗窪・林台遺跡	3 区 K 2 号礎化面	2023年『栗窪・林遺跡、栗窪・林台遺跡、栗窪・西石田遺跡 (No.71)』 かながわ考古学財団調査報告334
158	栗窪・林台遺跡	125CK 1 号道状遺構	2023年『栗窪・林遺跡、栗窪・林台遺跡、栗窪・西石田遺跡 (No.71)』 かながわ考古学財団調査報告334
159	神成松遺跡第8地点Ⅰ (No.74)	C K 1 ・ 2 号段切り C K 1 号道状遺構 C K 5 号溝状遺構	2022年『神成松遺跡第8地点Ⅰ (No.74)』かながわ考古学財団調査報告331
160	神成松遺跡第8地点Ⅰ (No.74)	K 1 号溝状遺構 K 1 号道状遺構	2022年『神成松遺跡第8地点Ⅰ (No.74)』かながわ考古学財団調査報告331
161	神成松遺跡第8地点Ⅰ (No.74)	K 3 ～ 6 号溝状遺構 K 2 号道状遺構	2022年『神成松遺跡第8地点Ⅰ (No.74)』かながわ考古学財団調査報告331
162	西富岡・向畑遺跡 (No.160)	C K 1 号道状遺構	2014年『西富岡・向畑遺跡 (No.160)』かながわ考古学財団調査報告298

資料No.	151	遺跡名	上粕屋・石倉中遺跡 (No.40)
所在地	伊勢原市上粕屋		
遺構名	K 2 号道状遺構		
道 幅	60～740m		
年 代	18世紀前半期		
備 考	検出長4500m。北端部は調査区外へ展開しているため、全体は不明である。 硬化面では遺物が出土していないことから具体的な縄属時期は明瞭ではなく、確認面などの特徴から近世以降の所産として扱った。		
			
縮 尺	(平面図)1/360 (断面図) 1/120		

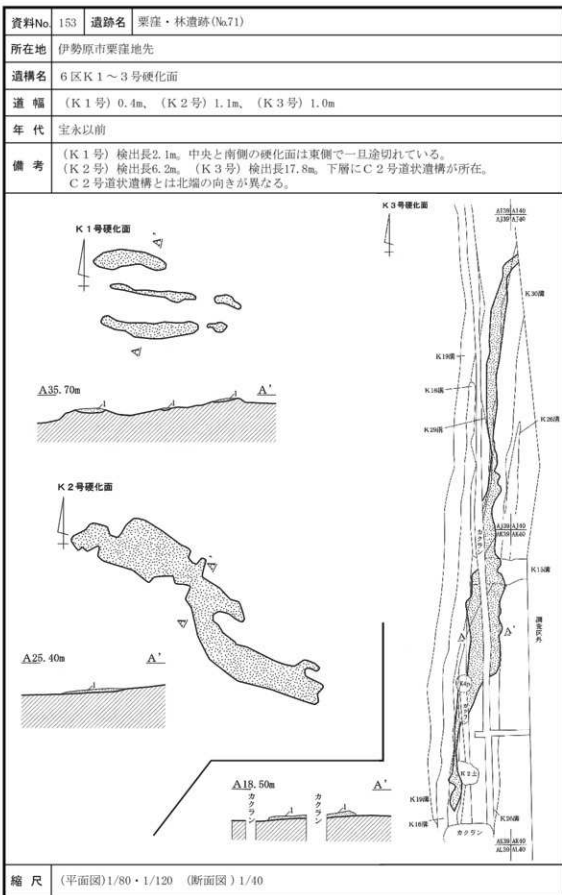
資料No.	152	遺跡名	上粕屋・石倉中遺跡(N ₀ 40)
所在地	伊勢原市上粕屋		
遺構名	K 1～4号硬化面		
道 幅	(K 1号)0.1m、(K 2号)0.2m、(K 3号)0.3m、(K 4号)0.2m		
年 代	宝永以前		
備 考	(K 1号)検出長3.4m、(K 2号)検出長0.6m、(K 3号)検出長4.0m、(K 4号)検出長1.4m。 全体的にはほぼ平坦で、いずれも顕著な傾斜や勾配はみられない。		

A 82.60m

B 82.60m

硬化面

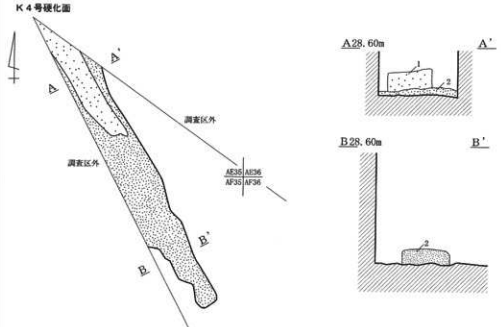
縮 尺	(平面図)1/120 (断面図)1/40
-----	----------------------



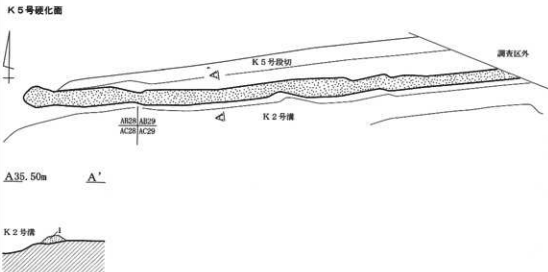
縮 尺 (平面図) 1/80・1/120 (断面図) 1/40

資料No.	154	遺跡名	栗窪・林遺跡 (No. 71)
所在地	伊勢原市栗窪地先		
遺構名	6区K4・5号硬化面		
道幅	(K4号)0.5m, (K5号)0.4m		
年代	宝永以前		
備考	(K4号)検出長最大7.2m, 厚さ0.1~0.2m, 北西端から南東に向かって延び、北から南に向けて傾斜している。 (K5号)検出長10.2m, 厚さ0.1m, 東西に向き、北側にK5号段切り、南側にK2号溝状遺構が存在する。		

K4号硬化面

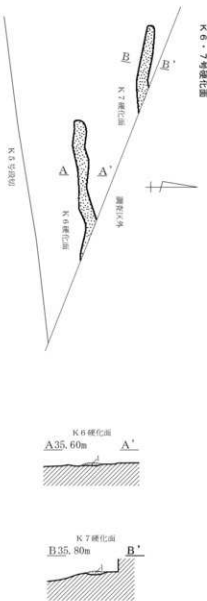
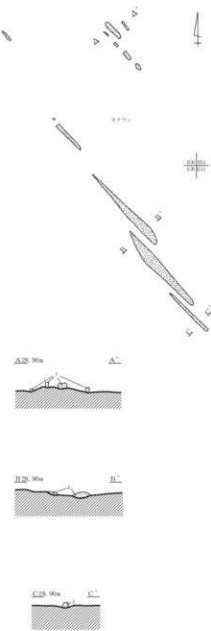


K5号硬化面



K2号溝

縮尺	(平面図)1/80 (断面図)1/40
----	---------------------

資料No.	155	遺跡名	栗窪・林遺跡 (No. 71)	資料No.	156	遺跡名	栗窪・林台遺跡 (No. 71)
所在地	伊勢原市栗窪地先			所在地	伊勢原市栗窪地先		
遺構名	6区K 6 ・ 7号硬化面			遺構名	3区K 1号硬化面		
道 幅	0.2m			道 幅	0.4m		
年 代	宝永以前			年 代	近世		
備 考	(K 6号) 検出長2.8m。(K 7号) 検出長1.8m。硬化面の下は僅かに窪んでいるが、明確な掘込みは認められない。断面形は皿状である。			備 考	検出長11.8m。検出状況から耕作等に関する何らかの跡であると考えられるが詳細については不明である。		
							
縮 尺	(平面図) 1/80 (断面図) 1/40			縮 尺	(平面図) 1/120 (断面図) 1/60		

資料No.	157	遺跡名	栗窪・林台遺跡 (No.71)
所在地	伊勢原市栗窪地先		
遺構名	3区K 2号硬化面		
道 幅	0.2m		
年 代	宝永以前		
備 考	検出長22.0m。硬化面の土色調に違いが見られるのは、南東側の地形は南西から北東へ傾斜し、調査区端付近の一部で北東が高くなる複雑な地形であり、更に地山面の削平等が影響しているからと推定される。遺物は出土していない。		

調査区外

B31 B32
E31 E32

調査区外

調査区外

縮 尺	(平面図) 1/120 (断面図) 1/40
-----	------------------------

資料No.	158	遺跡名	栗窪・林台遺跡 (No.71)
所在地	伊勢原市栗窪地先		
遺構名	12区K 1号道状遺構		
道 幅	0.3～0.5m		
年 代	宝永以前		
備 考	検出長8.5m。本遺構の北側では奈良・平安時代の道状遺構が発見され、南側には現在使用されている道路があることから、台地へ通じる道が少しずつ場所を変えながら設けられていたものと思われる。		

A 25.30m

A'

B 25.30m

B'

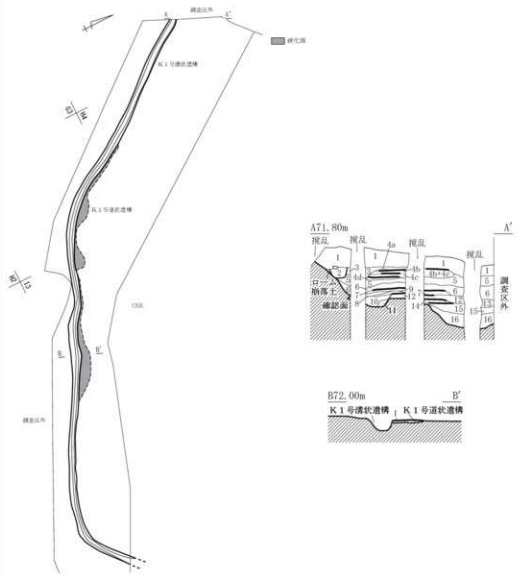
縮 尺 (平面図) 1/120 (断面図) 1/40

資料No.	159	遺跡名	神成松遺跡第8地点Ⅰ (No. 74)
所在地	伊勢原市上粕屋		
遺構名	CK1・2号段切り・CK1号道状遺構・CK5号溝状遺構		
道幅	(CK1号段切り)2.3m、(CK2号段切り)7.4m、(CK1号道状遺構)1.3m、(CK5号溝状遺構)0.7m～1.8m		
年代	宝永以前		
備考	(CK1号段切り) 検出長60m。相模原段丘と中津原段丘の段差を利用して構築された段切り。 (CK2号段切り) 検出長24m。構築時の地形は近世以降、形状は改変された可能性が高い。 (CK1号道状遺構) 検出長11m。北西側寄りは近世以降の開墾等により削平され、消失した可能性が高い。 (CK5号溝状遺構) 検出長12m。宝永火山灰を含まず、宝永火山噴火以前の時期のものと考えられる。		

The figure consists of a plan view and three cross-sections of the Kikagiri Site, No. 74. The plan view (top left) shows the layout of the site, including the CK1, CK2, and CK5 features. A north arrow and a scale bar (0 to 100m) are provided. The cross-sections (bottom) show the profile of the site, with labels for CK1, CK2, and CK5, and a scale bar (0 to 100m). The plan view also includes labels for 'CK1号段切り' and 'CK2号段切り'.

縮尺	(平面図)1/480 (断面図)1/120
----	-----------------------

資料No.	160	遺跡名	神成松遺跡第8地点Ⅰ (No. 74)
所在地	伊勢原市上粕屋		
遺構名	K1号溝状遺構・K1号道状遺構		
道 幅	(K1号溝状遺構)0.9m、(K1号道状遺構)0.8m		
年 代	江戸時代末期		
備 考	(K1号溝状遺構)検出長47.3m。江戸時代末期の遺構と推定される。 (K1号道状遺構)検出長21.2m。宝永降灰後～江戸時代末期の遺構と推定。		



埋込層

A71.80m

埋込層

埋込層

埋込層

調査穴外

B72.00m

K1号溝状遺構 K1号道状遺構

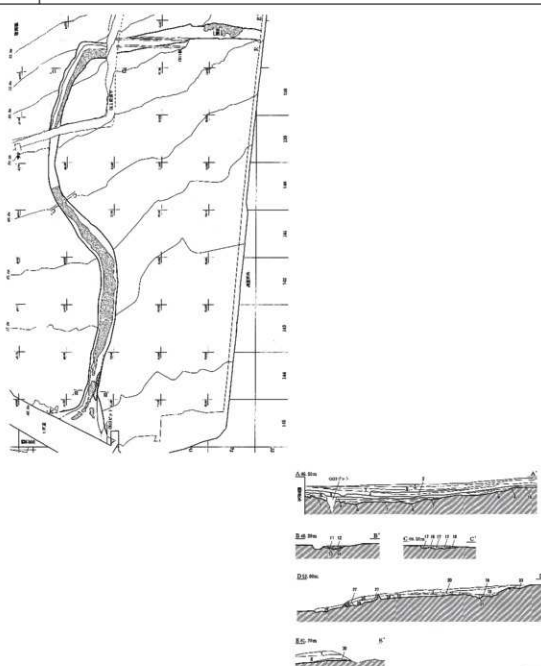
縮 尺	(平面図)1/300 (断面図)1/100
-----	-----------------------

資料No.	161	遺跡名	神成松遺跡第8地点Ⅰ (No. 74)
所在地	伊勢原市上粕屋		
遺構名	K 3号溝状遺構・K 2号道状遺構		
道幅	(K 3号溝状遺構)1.5m、(K 2号道状遺構)2.0m		
年代	江戸時代末期		
備考	(K 3号溝状遺構)検出長43.4m、遺構の先後関係から、江戸時代末期の遺構と推定される。 (K 2号道状遺構)検出長34.3m、東側端部は近世以降の削平をうけた可能性が高い。		

The plan view shows the layout of the K3 ditch (K3号溝状遺構) and K2 road (K2号道状遺構) with various survey points (A71, B70, etc.) and directions (N, S, E, W). The cross-sections show the stratigraphy of the ditch and road, with layers numbered 1 through 16. The K3 ditch cross-section shows a ditch with a width of 1.5m and a depth of 1.80m. The K2 road cross-section shows a road with a width of 2.0m and a depth of 0.00m. The plan view also includes a legend for '確認面' (confirmed surface) and '調査区外' (outside survey area).

縮尺	(平面図)1/300 (断面図) 1/100
----	------------------------

資料No.	162	遺跡名	西富岡・向畑遺跡 (No.160)
所在地	伊勢原市西富岡		
遺構名	CK 1 号道状遺構		
道 幅	1.4～4.2m		
年 代	宝永以前		
備 考	検出長122.8m。東から屈折する形で西に向けて構築されている。		



縮 尺	(平面図)1/800 (断面図) 1/200
-----	------------------------

研究紀要30

かながわの考古学

発行日 2025（令和7）年7月24日

発行 公益財団法人かながわ考古学財団

〒232-0033 神奈川県横浜市南区中村町3-191-1

TEL：045-252-8689 FAX：045-261-8162

<https://www.kaf.or.jp>

印刷 野崎印刷紙器株式会社

